久保尻遺跡

ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

久保尻遺跡（くぼじりいせき）

ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1996年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市竜丘地区は飯田市街地の南部、天竜川西岸に位置し、川沿いの平坦地こそ少ないが、温暖で平坦地の多い快適な生活環境に恵まれています。また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相いれない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

信州いいだ農業協同組合では、平成6年度に店舗の進出等開発の著しい竜丘桐林地区の国道151号沿いに、ガソリンスタンドの建設を計画しました。車の通行量が多い国道沿いにガソリンスタンドを建設することは、車が欠くことのできない交通手段であることを考えれば、必要な事業といえます。しかし、当該事業地には久保尻遺跡が存在し、工事実施によって壊されてしまうおそれがでてきました。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査成果は本文で述べられているとおりでありますが、調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた信州いいだ農業協同組合と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できますことに対して厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

飯田市教育委員会
教育長　小　林　恭之助

例　　言

1．本書は信州いいだ農業協同組合ガソリンスタンド建設に伴って実施された、飯田市桐林「久保尻遺跡」の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、信州いいだ農業共同組合からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、平成６年度に現場作業、平成７年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．調査実施に当たり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影・遺物写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。

5．発掘作業・整理作業に当たり、遺跡略号としてＫＫＪを一貫して用いた。なお、遺跡の中心地番である1008-7を略号に続けて付した。

6．本報告書の記載順は住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7．本書は山下誠一が執筆した。なお、本文の一部につき小林正春が加筆修正した。

8．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。

9．本書の編集は調査員の協議により山下誠一が行った。

10．本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ(単位㎝)を表している。

11．本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本　文　目　次

序
例　言
Ⅰ　経　過……1
　1．調査に至るまでの経過……1
　2．調査の経過……1
　3．調査組織……2
　　1）調　査……2
　　2）指　導……2
　　3）事務局……2
Ⅱ　遺跡の環境……3
　1．自然環境……3
　2．歴史環境……6
Ⅲ　調査結果……9
　　1）調査の方法と概要……9
　　2）基本層序……9
　　3）遺構と遺物……10
　　(1) 竪穴住居址……10
　　(2) 溝　址……12
　　(3) 土坑・柱穴……19
　　(4) その他の遺構……26
Ⅳ　まとめ……27
報告書抄録……57

挿　図　目　次

挿図1　久保尻遺跡位置図……4
挿図2　久保尻遺跡調査位置図及び周辺図……5
挿図3　久保尻遺跡遺構全体図……8
挿図4　基本層序……9
挿図5　1号住居址……10
挿図6　2号住居址……11
挿図7　3号住居址……12
挿図8　溝址1……13
挿図9　溝址2・7……14

挿図10　溝址３・８・９……15
挿図11　溝址４・水田址１……17
挿図12　溝址５・６……18
挿図13　土坑・柱穴(1)……21
挿図14　土坑・柱穴(2)……22
挿図15　土坑・柱穴(3)……23
挿図16　土坑・柱穴(4)……24
挿図17　土坑……25
挿図18　火葬墓１……26
挿図19　集石１……26

図　版　目　次

第１図　２号住居址、溝址２・３出土土器……29
第２図　溝址４・５・７・８・９出土土器……30
第３図　土坑・水田址出土土器……31
第４図　遺構外出土土器……32
第５図　２号住居址、溝址３・４・５、遺構外出土石器……33

写真図版目次

図版１　１号住居址　１号住居址及び周辺柱穴……36
図版２　２号住居址（北東から）　２号住居址（南西から）　３号住居址……37
図版３　溝址１（北西から）　溝址２(北西から)……38
図版４　南東側調査区溝址３（北西から）　北西側調査区溝址３（南東から）
北西側調査区溝址３（北西から）……39
図版５　溝址４（南東から）　溝址４（北西から）　南東側調査区溝址５（南東から）
南東側調査区溝址５（北西から）……40
図版６　北西側調査区溝址５（北西から）　南東側調査区溝址６（南東から）
南東側調査区溝址６（北西から）……41
図版７　北西側調査区溝址６（南東から）　溝址７（南東から）……42
図版８　溝址８（南東から）　溝址８（北西から）　溝址９（南東から）……43
図版９　土坑１　土坑４……44
図版10　土坑７　土坑23……45
図版11　火葬墓１　集石１……46
図版12　水田址１（南西から）　水田址１（北東から）　溝址７・１号住居址（南東から）……47
図版13　南東側調査区全景（北から）　南東側調査区全景（北東から）……48

図版14　南東側調査区全景（南西から）　南東側調査区全景（南から）……49
図版15　北西側調査区全景（北東から）　北西側調査区全景（南西から）……50
図版16　南東側調査区（上空から）　南東側調査区（斜め上空南から）……51
図版17　溝址４出土土器　土坑１出土土器　土坑４出土土器……52
図版18　土坑３・23出土土器　溝址３出土石器　溝址３出土石器……53
図版19　溝址４出土石器　溝址５出土石器　２号住居址・遺構外出土石器……54
図版20　重機による拡張スナップ　遺構の掘り下げスナップ　ラジコンヘリスナップ……55

Ⅰ 経　　過

1. 調査に至るまでの経過

信州いいだ農業協同組合は、飯田市桐林の国道 153号沿いにガソリンスタンドの建設を計画した。当該地は埋蔵文化財包蔵地久保尻遺跡内にあり、何等かの保護措置が必要であった。そこで、平成6年2月8日に、信州いいだ農業協同組合・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者による保護協議を実施した。その結果、試掘調査を実施して本調査の可否を判断することとした。

試掘調査は平成6年2月28日に実施した。重機により2本のトレンチを設定し、遺跡の状況を確認した。竪穴住居址と考えられる落ち込み等を検出し、遺物の出土もあり本調査が必要と判断された。その後、信州いいだ農業協同組合と飯田市教育委員会の二者で、本調査や整理作業・報告書刊行の時期や費用について協議を重ね、平成6年度に本調査、平成7年度で整理作業を実施して報告書を刊行することとなった。

2. 調査の経過

調査予定地北西部に、水道管が埋設された幅の狭い市道が、南西・北東方向に横断していた。この箇所を含めて一度で調査することは不可能だったので、調査区を南東側と北西側の2箇所に分けるように計画した。

委託契約を締結した平成6年4月11日に、南東側の調査区を重機で拡張し、作業員をお願いして本調査を開始した。検出した遺構を順次掘り下げて、写真撮影等を済ませた。航空写真撮影・写真測量業務は（株）ジャステックに委託して、平成6年5月19日までに測量を除いた作業を終了した。

北東側の調査区は平成6年5月20日に重機を導入して拡張して調査を開始した。竪穴住居址・柱穴等の掘り下げを実施し、写真撮影・測量作業を済ませ、平成6年6月2日には現場におけるすべての作業が終了した。

その後、飯田市考古資料館で図面・写真等の基本的整理を実施して、平成7年3月に発掘調査概要報告書を作成した。

平成7年度は、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第2原図の作成・トレース・版組み等を行い、本発掘調査報告書を作成した。

3．調査組織

1）調　査

調査担当者　吉川　豊　山下　誠一

調　査　員　小林　正春　佐々木嘉和　馬場　保之　吉川　金利　福澤　好晃　下平　博行
伊藤　尚志

作　業　員　新井　幸子　奥村　栄子　金井　照子　金子　正子　金子　裕子　唐沢古千代
木下　貞子　木下　義男　小島　幸子　小林　定雄　斉藤　千里　斉藤　徳子
坂井　勇雄　佐藤知代子　清水ヒロ子　島岡　敬子　下田芙美子　関島　信子
関島真由美　竹本　常子　田中　薫　塚原　次郎　中田　亀雄　中平　隆雄
鳴海　紀彦　久田　誠　樋本　宣子　福澤　育子　福澤　幸子　牧内　郁代
牧内　修　牧内喜久子　牧内　達雄　松下　直市　松下　真幸　松下　光利
松村かつみ　溝上　清見　森　章　矢澤　博志　吉沢佐紀子

2）指　導

長野県教育委員会文化課

3）事務局

飯田市教育委員会社会教育課

横田　穆（社会教育課長）
小林　正春（　〃　文化係長）
吉川　豊（　〃　文化係）
山下　誠一（　〃　〃　）
馬場　保之（　〃　〃　）
吉川　金利（　〃　〃　）
福澤　好晃（　〃　〃　）
下平　博行（　〃　〃　）
伊藤　尚志（　〃　〃　）
岡田　茂子（　〃　社会教育係）

II　遺跡の立地と環境

1．自然環境

久保尻遺跡の所在する長野県飯田市桐林は、自治体合併によって飯田市となった旧竜丘村桐林で、竜丘地区のほぼ中央部に位置する。

竜丘地区は、飯田市市街地から南方に4～8㎞離れた天竜川西岸に立地し、標高340～560mの間に位置する。周囲は地形の変化によって隣接の地区と画されている。北は毛賀沢により松尾・鼎地区と、東は天竜川によって下久堅・龍江地区と、南は久米・茂都計川によって川路地区と、そして西は上位段丘端部により伊賀良地区に隣接するほぼ方形の地域である。地区全体が東あるいは南面し、標高が低いこともあり、特に冬場の生活環境は市内でも優位に位置づけられている。

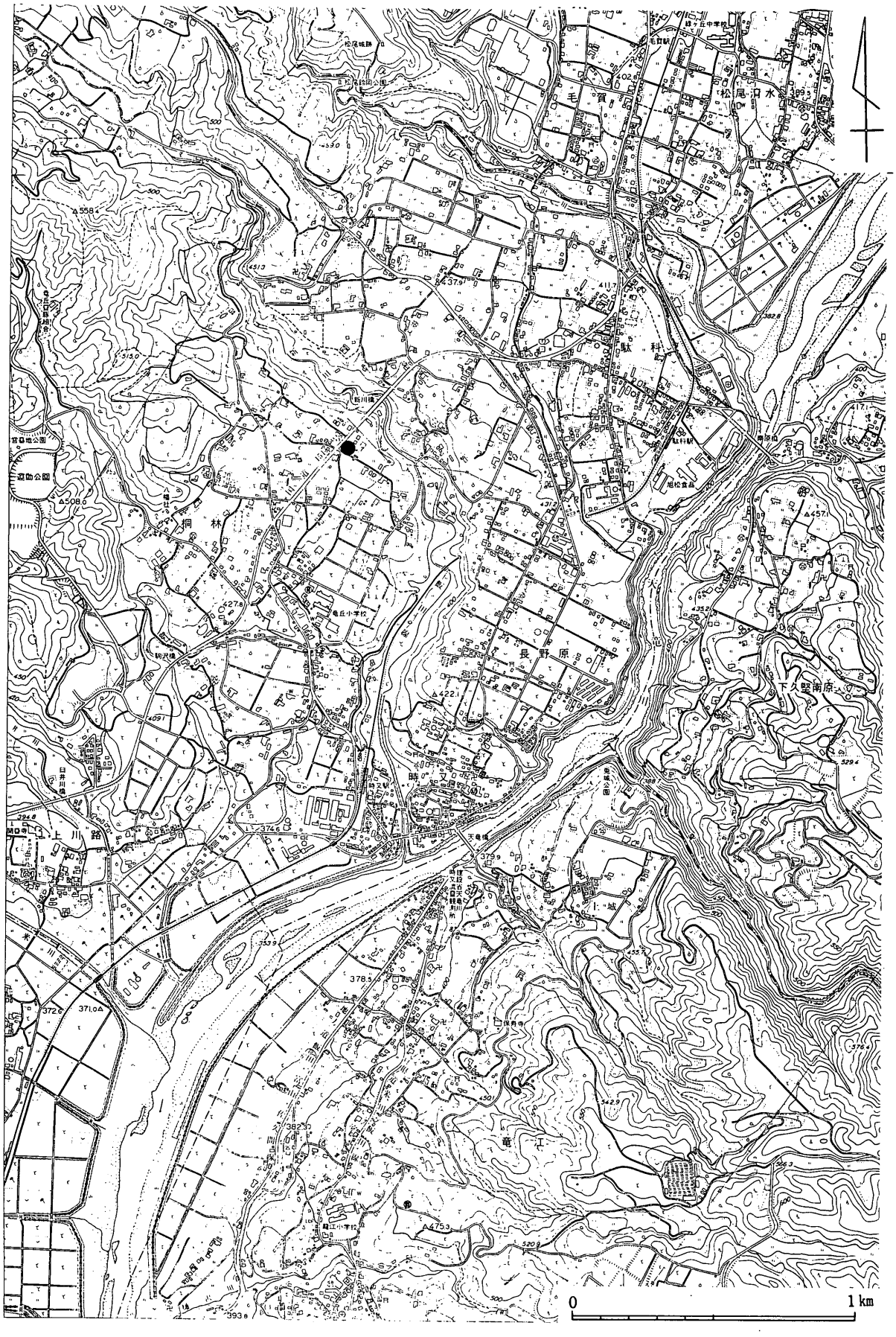
地区内は原則的に段丘地形をもって捉えられるが、それを大小の天竜川支流が解析し、小地域ごとの地形変化は多様である。大きくは、西側の上位段丘端部で伊賀良地区と境を接する付近が丘陵状の山間地となり、その東方一帯に当たる地区内の大半は段丘平坦面が連続する。また、天竜川の各支流両側は山間部・段丘面部分とも深く浸食された谷地形をなしている。

土地利用の姿は、前述の地形差により、山林・畑地・水田とに分けられる。中世に掘削された用水路大井の通水によって、長野原台地上の水田開発はあったものの、大きくは自然地形の条件下で、古代からの土地利用形態を踏襲していると考えられる。

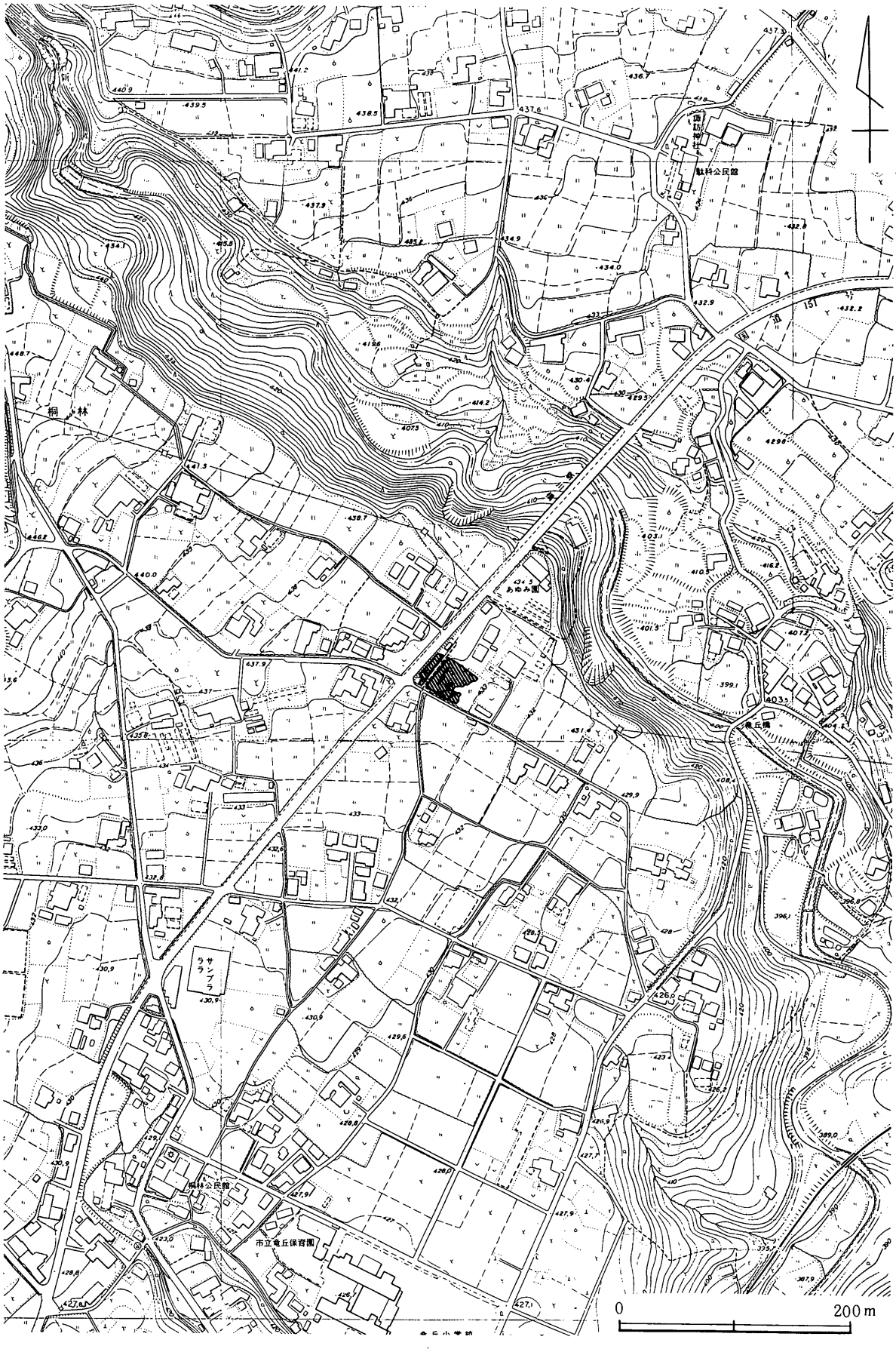
地区内西端に連続する丘陵は、様々な植生の分布が認められ、駄科・桐林・上川路の各地には、市指定天然記念物「ギフチョウ」の繁殖地もあり、近年市街化の進行する地区であるにもかかわらず、優れた自然環境の地といえる。

次に、久保尻遺跡のある桐林地区について若干その環境を示すと、北は新川の深い谷により駄科地区と接し、南は臼井川によって上川路地区と境する。西は前述の丘陵より伊賀良地区、東は中位段丘や浸食谷によって長野原・時又地区とに囲まれた竜丘地区の中心部に当たる。天竜川に面することこそないが、自然環境は前述の竜丘地区全体のあり方そのものが当地区においてあったといえる。

また、久保尻遺跡の所在する地は、桐林地区からみれば北東端にあたり、中位の段丘面上にある。周囲は、近年宅地開発等の諸開発の進行が著しいが、本来比較的高燥な地であり、大半が桑園として活用されていた。なお、遺跡の南側は、縄文時代・古墳時代の集落として著名な前の原遺跡（飯田市教育委員会1975・1990）に連続し、その西方は現国道151号付近から西方段丘崖下にかけて大きな湿地帯をなしており、水田地帯となっている。北側は新川の深い谷によって地形を画されており、新川に面した台地上に立地する遺跡といえる。



挿図１　久保尻遺跡位置図



挿図２　久保尻遺跡調査位置図及び周辺図

2．歴史環境

当地区内には、禅宗の古刹開善寺が所在したり、当地方を代表する中世山城である長野県史跡鈴岡城跡の存在など、中世以降の文献に示された歴史事実の内容が多岐にわたっている。さらに、それ以前の文字資料の欠落した時代においても、様々な特徴を持って歴史が動いていたと推測される。

その具体的例として、140基を数える古墳が地区内全域に築造された事実があり、また様々な時代・内容の埋蔵文化財包蔵地の所在が知られており、古くより人々が定着し、生活し続けてきた事実があったことが判断されることによる。

地区内においては、昭和42年に国道151号の改修に伴って鏡塚古墳の発掘調査を実施したのを皮切りに、10ヶ所を越える埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の発掘調査が行われている。駄科地区の安宅・大島・北平・宮城遺跡、井ゾエ１号墳・井ゾエ２号墳・ツカノコシ古墳、桐林地区の前の原・塚原・蒜田・ガンドウ洞遺跡・蒜田古墳・塚原二子塚、上川路の上の坊遺跡等である。それにより、地域における新しい事実が積み重ねられ、歴史解明にいくつかの示唆を与えてくれた。

竜丘にいつ頃から人々が生活したかについて具体的に示されたのは、上川路上の坊遺跡からの縄文時代前期資料の発見が最も古い時代のものであり、前の原・宮城・安宅・駄科北平遺跡等から、縄文時代時代中期の竪穴住居址がそれに続く。いずれも狭い範囲の調査にとどまったために、必ずしも全体が明らかになったわけではないが、調査範囲外にさらに多数の竪穴住居址等が存在すると考えられる。これらは、竜丘という安定した自然環境の中で、かなり大規模な集落が形成されていたと判断される。

現状では、これより古い時代の資料については竜丘地区では確認されてない。しかし、近年市内各所で実施される遺跡発掘調査により、今までは考えられなかったような場所から予想外な資料が発見されることもあり、より古い時代から竜丘に人々が居住していた事実が明らかになる可能性はきわめて大きいといえる。

続く弥生時代に至ると、その前期から中期段階までの生活の痕跡は、わずかに認められる程度である。後期段階になると、当地方の全体の傾向と合致して、遺跡数・集落規模ともに爆発的に増加する姿が、当竜丘地区内でも認められる。その具体的な姿は、駄科安宅・大島遺跡、桐林蒜田遺跡などで竪穴住居址が確認されていることからうかがえる。また、発掘調査こそ行われていないが、地区内の全域から同時代の土器や石器が採集されている。こうしたことからもかなり広範囲に人々の生活した場があったことがうかがえる。

弥生時代と連続する古墳時代の初期は弥生時代後期に比べると遺跡が縮小する傾向を示すが、古墳時代中期から後期に至ると、地区内に築造された古墳総数140基が示すとおり、市内はもちろん長野県全体からみても該期の中心的な位置づけがなされるところである。

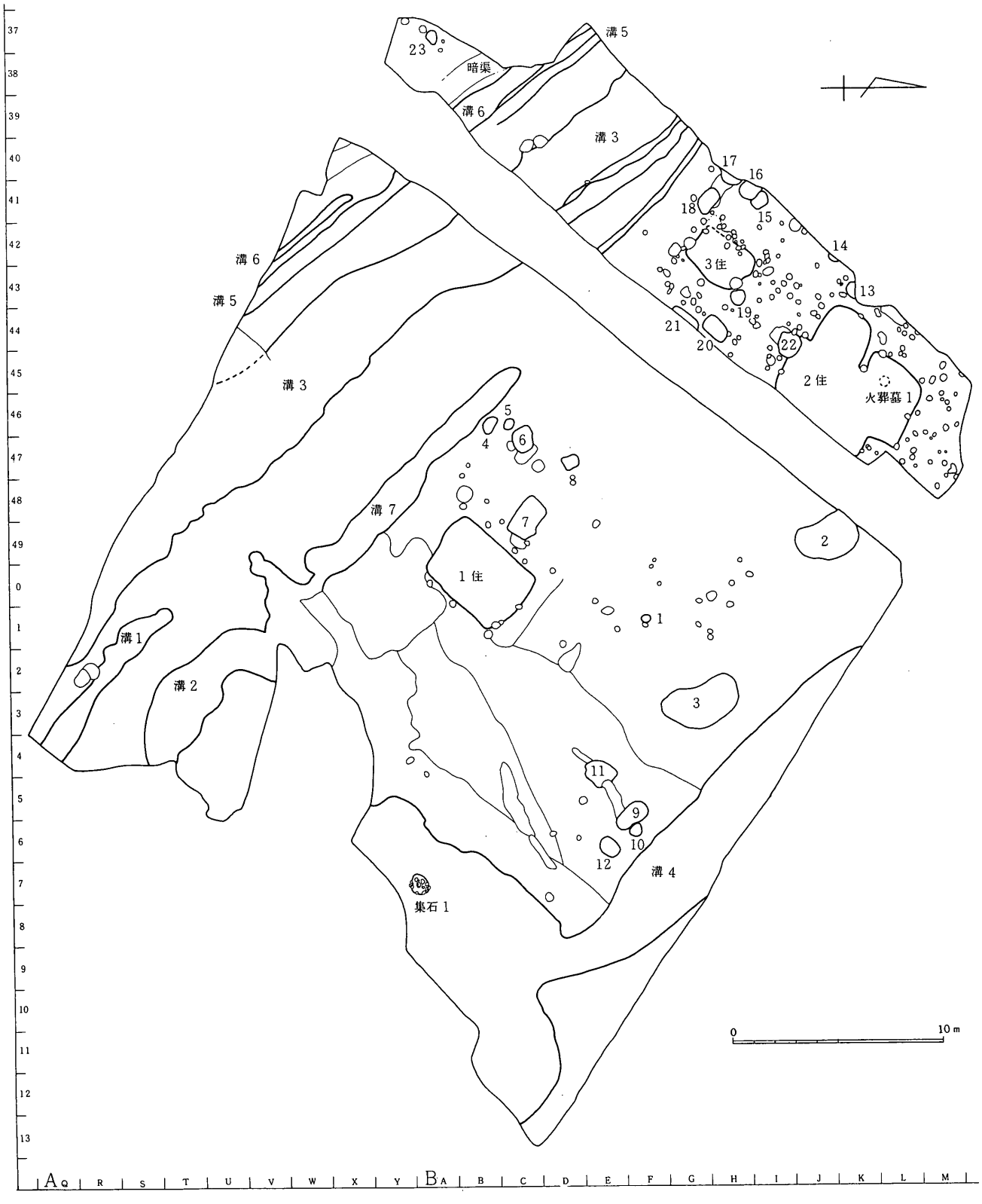
これらの古墳は、古墳時代全体を通じて造られたわけでなく、５世紀以降に属するものがほとんどである。このことは古墳文化を汎日本的に捉えたときに、一つの特徴的な姿を読みとることができる。それは畿内における大和王権による大古墳築造のあり方と、日本全国へ向けての勢力拡散の姿を一地域内においても同様な姿として捉えられることである。すなわち、この竜丘の地が５世紀を契機として、畿内巨大勢力と結びついた地として考えられる。さらには、大和王権による東国支配の拠点として、きわめて重要な地であったことを示すことのほかにならない。

そのような、汎日本的な位置づけがなされる中で、地区内において当然でなことはあるが140基の古墳に葬られた人々も、又、それを造る作業に直接従事した人々も居住していたわけであり、それが地域内各所の遺跡として位置づけられる。現在までに発掘調査により竪穴住居址等の確認された遺跡は、駄科安宅遺跡、桐林前の原・小池・ガンドウ洞遺跡等がある。それらは、当時の集落からみればごく一部分であり、ここの集落としてもほんの一部が解明されたにとどまっている。今後の調査により、居住域と古墳つまり墓所との関連が具体的に示される地としても注目されるわけである。

隆盛した古墳時代に続く奈良・平安時代にも、引き続き様々な歴史事象が展開した。大和政権の確立とともに、中央政治が地方にも浸透する姿があり、当地区内においても、それまで活発であった古墳築造はされなくなる。しかし、古墳を造り続けた地域勢力は、その結集した姿として仏教文化を接受し、寺院の築造を果たしている。それが、開善寺西境内に所在した上川路廃寺であり、桐林西方の丘陵地にあった前林廃寺である。また、それに関連して様々な経済活動の姿が認められ、特記事項の一つとして、当地方屈指の須恵器生産地であったことが示される。また、駄科北平・安宅遺跡、桐林内山・花の木・小池遺跡等で竪穴住居址が調査されており、集落域の一端が明らかとなっている。

さらに、中世以降の地区内の様相としては、現在の開善寺にあたる開禅寺の開基、山城鈴岡城の築造などが行われている。発掘調査によっても駄科北平遺跡から堂址・竪穴住居址・掘立柱建物址が確認されて、中世の人々の生活の一端をかいま見ることができる。いずれにせよ、当地方の中心的な地区としての位置づけは動かないものがある。

以上、竜丘地区内の文化財により示される歴史事象を列記したが、いずれの時代においても伊那谷の中核的な位置づけのなされる地としての姿があるといえる。



挿図3　久保尻遺跡遺構全体図

Ⅲ 調 査 結 果

1）調査の方法と概要

今次調査地の調査前は3枚の水田として利用されており、北西側1枚と南東側2枚の水田間に水道管が埋設された幅の狭い市道が、南西・北東方向に横断していた。水道管の移設が工事直前でなければできなかったので、調査区を市道をはさんで南東側と北東側の2箇所に分けた。

測量用の基準杭の設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については、『中村中平遺跡』に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画はLC－94　14－24　15－17である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

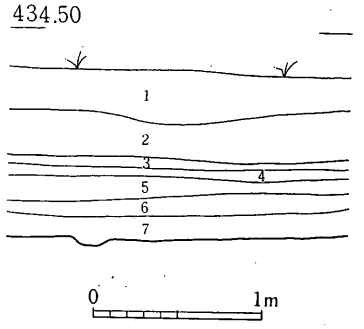
竪穴住居址……3軒
溝　　址……9本
土　　坑……23基
柱　　穴……多数
集　　石……1基
火　葬　墓……1基
水　田　址……1枚

2）基本層序

水田による造成を受けており、比較的残りのよい北西側調査地土坑4南西側の北西に面する壁面の層序を挿図4で示した。

1層：灰色土、水田の耕土である。
2層：黄色土（灰色土混じり）、水田造成の埋土である。
3層：暗青灰色土、旧水田面である。
4層：暗青灰色土（鉄分沈殿）、旧水田の床土である。
5層：暗青灰色土（わずかに鉄分沈殿）、旧水田面である。
6層：暗青灰色土（鉄分沈殿）、旧水田の床土である。
7層：暗灰色土、土坑・柱穴の覆土の大半と共通する。

遺構検出面は7層下の黄色土であるが、その様相は一様でない。北西調査区ではほぼ全面黄色土であるが、南東調査区では礫を包含していたり砂質土であったり、色調が灰色がかったりと変化に富んでいる。



1．灰色土
2．黄色土（灰色土混じり）
3．暗青灰色土
4．暗青灰色土（鉄分沈殿）
5．暗青灰色土（わずかに鉄分が沈殿する）
6．暗青灰色土（鉄分沈殿）
7．暗灰色土

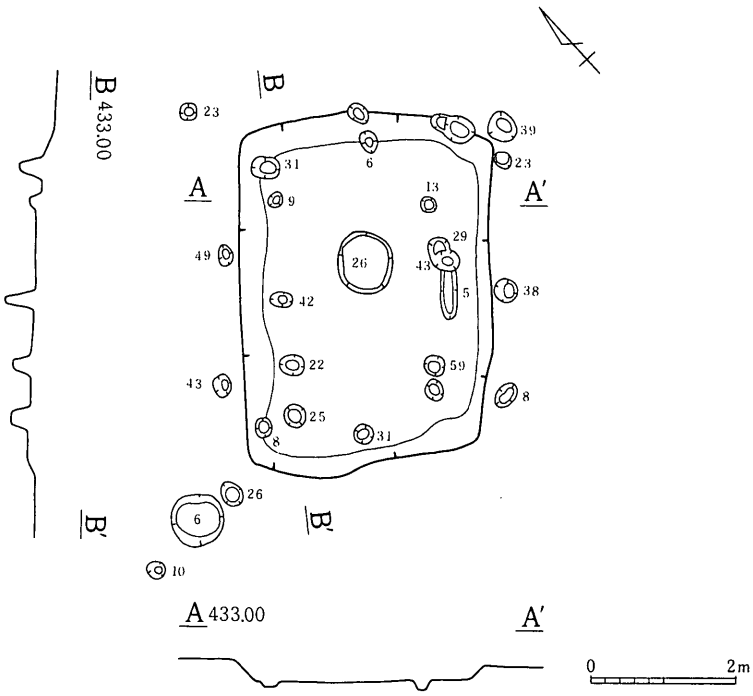
挿図4　基本層序

3）遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

① 1号住居址(挿図5、図版1)

遺構 南東側調査区中央ＢＢ０を中心にして検出し、全体を調査した。4.8 ×3.4 mの隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸方向はN44° Eを示す。壁高は18～10cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は黄色砂土層まで掘られ、たたき状に堅く良好である。特に、中央部東側が堅固であった。主柱穴は北東壁・南西壁際中央部に位置する2本と考えられ、北西壁際に5本、南東壁際に4本の柱穴が並ぶ。床面中央部には86×65cmの大きな穴があり、覆土はほぼ一層で住居使用時には埋められていたと想定される。北西壁外に4本、南東壁外に4本の柱穴が間隔はまちまちであるが方向を揃えて並ぶ。本址の付属施設と考えられる。



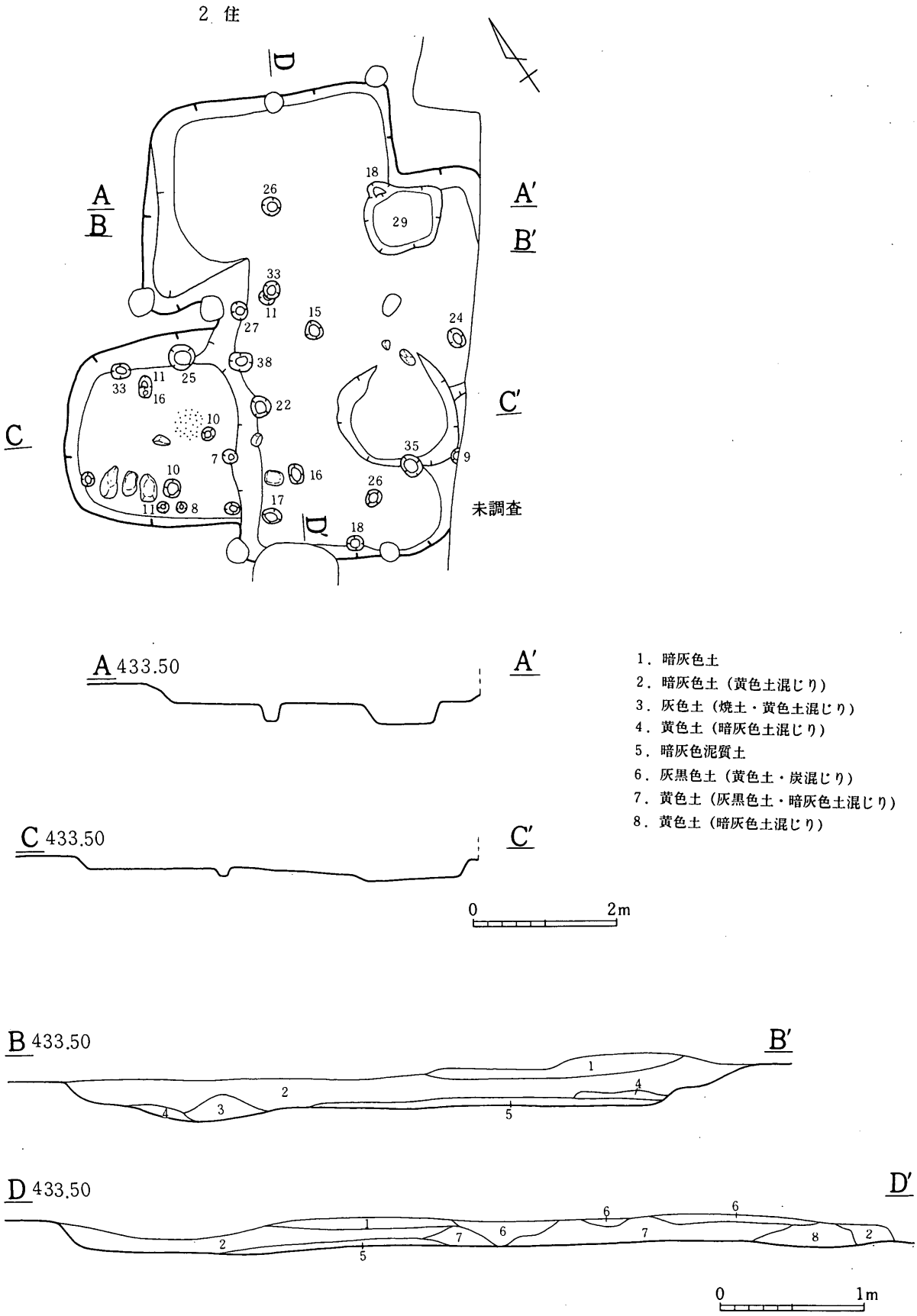
挿図5 1号住居址

遺物 出土遺物は極めて少なく、図示できる遺物はない。

遺物の出土が少ないので詳細な時期は決定できないが、住居址形態等から中世に位置づけられる。

② 2号住居址（挿図6、第1・5図、図版2）

遺構 北西側調査区北部ＢＫ46を中心にして調査し、東側一部が未調査となった。中世の火葬墓1に切られ、中世の土坑22を切る。6.5 ×5.4 mの竪穴住居址で、隅丸長方形を4つ重ねたような形態を示す。壁高は26～4cmを測り、全体に緩やかな壁高をなす。床面はたたき状に堅く、中でも北側が極めて良好であった。西側の床面は他よりわずかに高くなっており、床面の状況も他より軟弱であった。主柱穴は中央部を4本直線的に並ぶものが想定されるが、その他にも穴があり、これらを含めて十分に役割等を把握できなかった。北西壁際に104 ×84cmの丸みを帯びた長方形の穴、南東側壁下には156 ×140cmの円形の浅い穴がある。それぞれの用途は不明である。南西壁際床面上には、40cm前後の礫3個が置かれる。


2 住
D
A
B
A′
B′
C
C′
D′
未調査
A 433.50
A′
C 433.50
C′
B 433.50
B′
D 433.50
D′
0
2m
0
1m
1．暗灰色土
2．暗灰色土（黄色土混じり）
3．灰色土（焼土・黄色土混じり）
4．黄色土（暗灰色土混じり）
5．暗灰色泥質土
6．灰黒色土（黄色土・炭混じり）
7．黄色土（灰黒色土・暗灰色土混じり）
8．黄色土（暗灰色土混じり）

挿図6　2号住居址

竪穴住居址の形態は４軒を重複させたようであり、切り合い関係の有無も検討した。最終的には１軒の住居址と判断し、役割の異なる部屋があったと考えられる。

遺物　遺物の出土は少ない。図示できるるのは、天目茶碗（１－１）・砥石（５－１）の２点だけである。

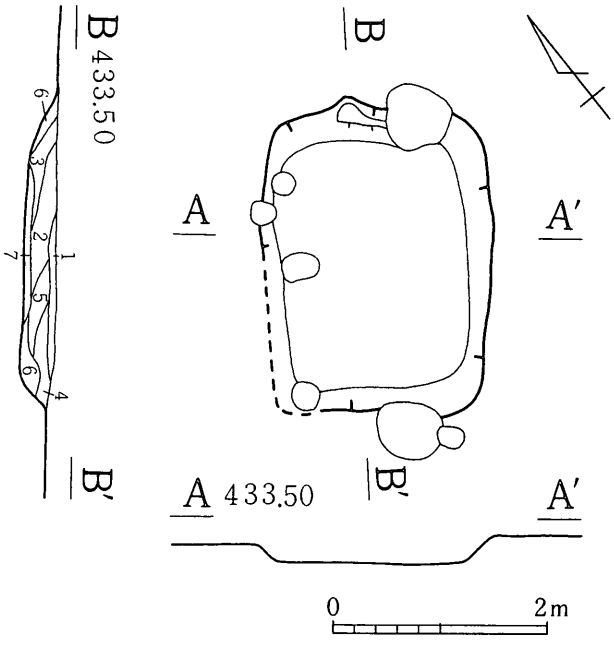
出土遺物から中世に位置づけられる。

③　**３号住居址**（挿図７、図版２）

遺構　北西側調査区中央部ＢＫ43を中心にして検出し、全体を調査した。柱穴と重複する。2.7 × 2.2 ｍの隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸方向はＮ40°Ｅを示す。壁高は26～17cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面はほぼ全面たたき状に堅く良好である。主柱穴等本址に付属する穴はない。

遺物　出土遺物は極めて少なく、図示遺物はない。

遺物の出土が少ないので詳細な時期は決定できないが、住居址形態等から中世に位置づけられる。



1．黄褐色土（床土）
2．黄色砂土（暗灰色土混じり）
3．暗灰色土（黄色砂土混じり）
4．黄色土（炭・暗灰色土混じり）
5．暗灰色土（黄色土・炭混じり）
6．暗灰色土（焼土・炭がわずかに混じる）
7．暗灰色泥質土

挿図７　３号住居址

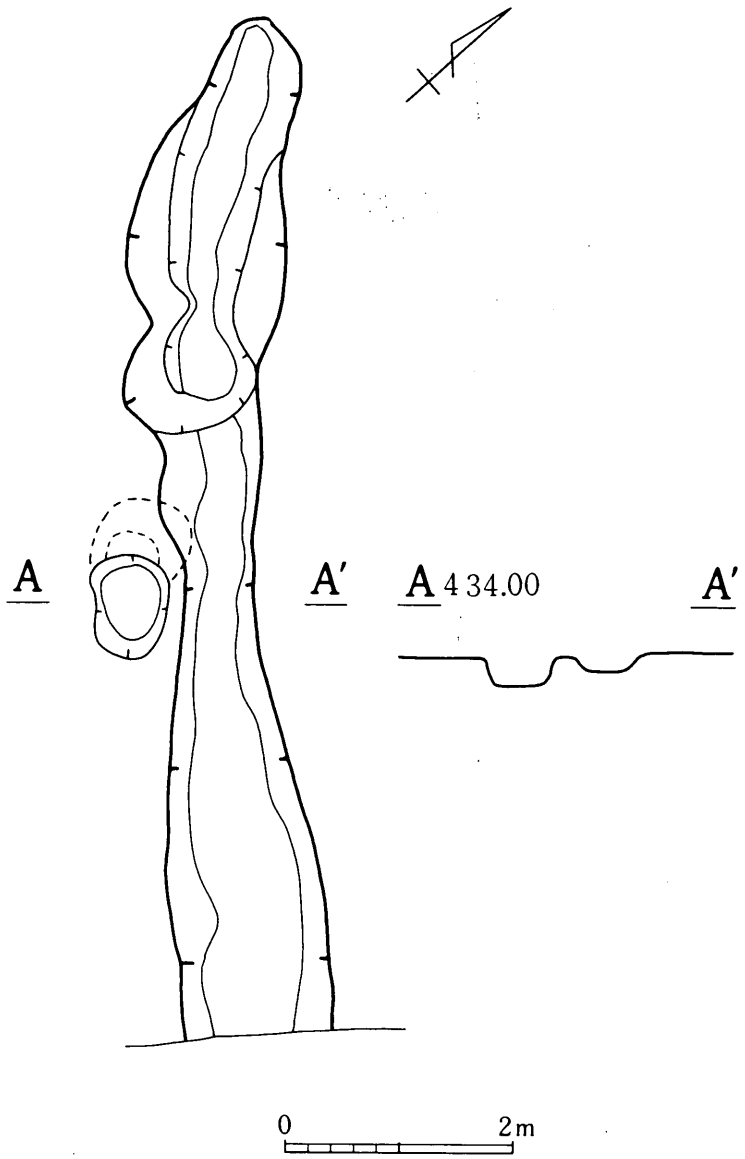
(2) 溝　址

①　**溝址１**（挿図８、図版３）

遺構　南東側調査区南部ＡＱ４からＡＴ１にかけて検出した。調査延長は9.1 ｍで、南東側用地外に延長する。北西側は検出できなかったが、水田の造成で削平されてしまったと考えられる。覆土は暗褐色土で底部に砂が認められ、方向はＮ38°Ｗを示す。幅136 ～60cm・深さ42～11cmを測り、断面形は逆台形を示す。遺構の状況や覆土から小沢川の痕跡と考えられ、北西から南東に流れたものといえる。

遺物　出土遺物は土師器片・須恵器片がわずかにあるのみである。

出土遺物が少なく確定した時期を示せないが、古墳時代後期に位置づく可能性が高い。



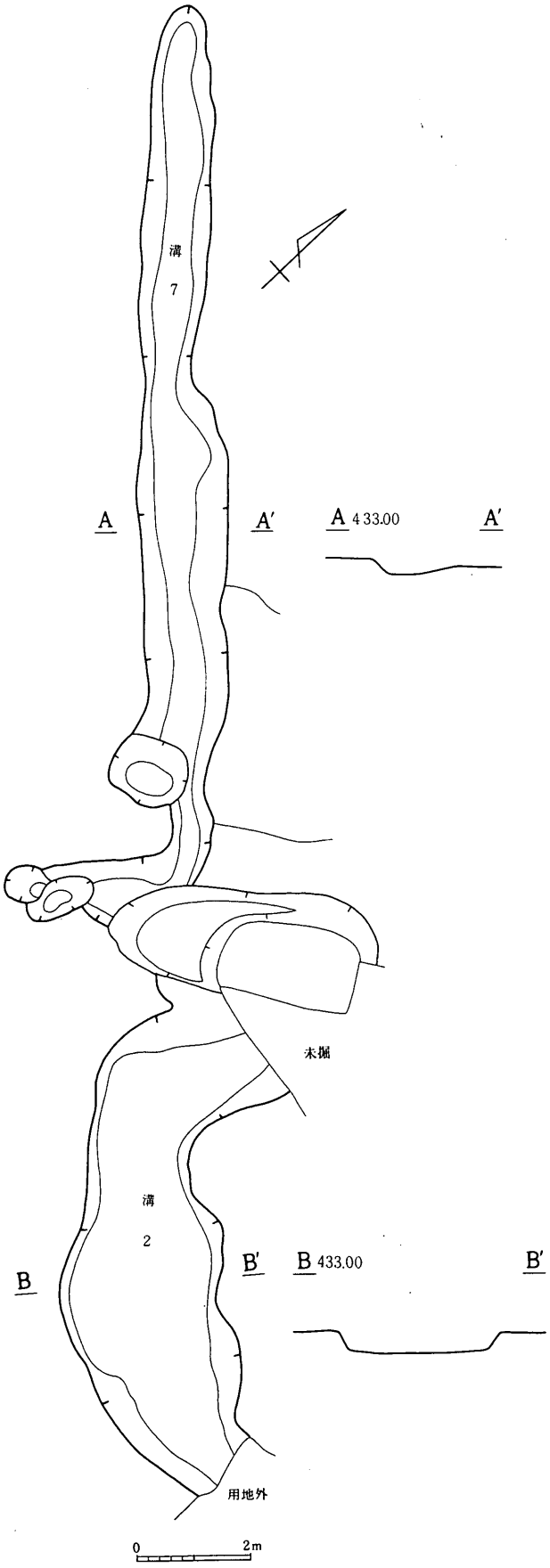
挿図8　溝址1

② **溝址2・7**（挿図9、第1・2図、図版3・7）

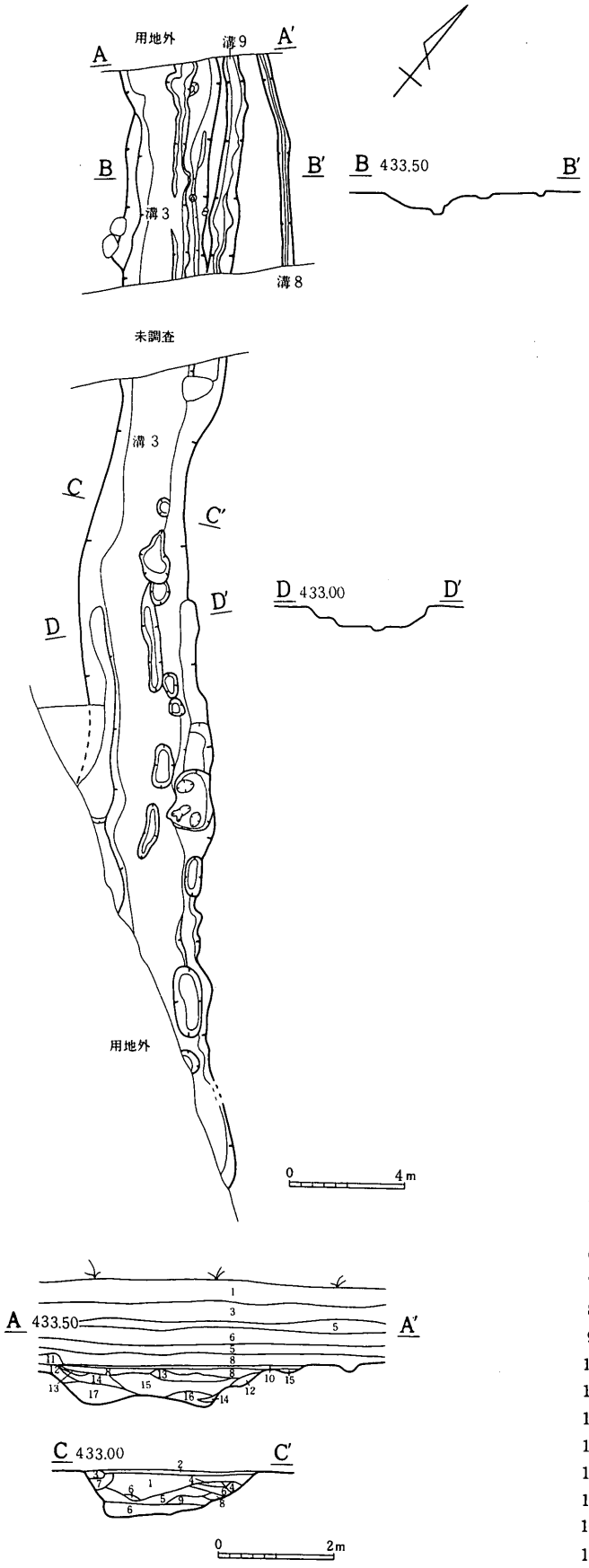
遺構　南東側調査区南西部ＡＳ４からＢＣ45にかけて検出した。土置き場の確保のため、溝址2と溝址7との調査時期が異なりかつ未調査部が生じてしまったので、調査終了後に図面の整理をして同一遺構の可能性が認められた。よって、名称はそのまま同一遺構として記述することとする。調査延長は25.6mで、溝址2は長さ8.2m・幅258～162cm・深さ37～19cmを測る。北側で緩く曲がり、南西側に延長する。溝址7は長さ15.0m・幅164～62cm・深さ25～10cmを測る。北西側は検出できなかったが、水田の造成で削平されており、続いていた可能性が高い。覆土は褐色土のほぼ一層で、方向はN45°Wを示す。

遺物　出土遺物は土師器片がわずかにあるのみである。

出土遺物が少なく確定した時期を示せないが、古墳時代後期に位置づく可能性が高い。



挿図9　溝址2・7



1．灰褐色土
2．灰褐色土（鉄分沈澱　床土）
3．黄褐色土（灰褐色土がわずかに混じる）
4．黄色土（灰褐色土混じり）
5．灰褐色粘質土
6．灰褐色砂利
7．灰色土
8．黄色土（灰褐色砂土混じり）
9．灰褐色砂土（灰褐色粘質土混じり）
10．灰褐色土（鉄分沈澱）
11．暗灰褐色土
12．灰褐色土（やや粘質）
13．灰色砂土（鉄分がわずかに沈澱する）
14．黄色土（灰褐色砂土混じり）
15．灰褐色砂利土
16．灰褐色砂利土（鉄分沈澱）
17．灰褐色砂利土（15cm前後の石が入る）

挿図10　溝址3・8・9

③　**溝址３**（挿図10、第１・５図、図版４）

遺構　南東側調査区南西部と北西側調査区南西部ＡＲ２からＡＧ39にかけて検出した。南東側で調査延長27.6m・幅400 ～260 cm・深さ82～８cm、北西側で調査延長9.4 m・幅 414～ 300cm・深さ80～65cmを測り、両側に延長する。方向はN47° Wを示し、断面形は途中で稜をもつ部分もあるが、基本的に逆台形をなす。覆土は何層にも分かれており、底部付近は砂利・砂が主体となる。底部は水流によって抉れた箇所が多く認められる。

遺物　出土遺物は比較的多く、土師器・須恵器・山茶碗鉢・打製石斧等がある。

主体となるのは古墳時代後期の遺物であるが、周辺からの流れ込みと考えられ、本址の時期を示すものではない。最も新しい遺物から中世に位置づけられる。

④　**溝址４**（挿図11、第２・５図、図版５）

遺構　南東側調査区北端部ＢＤ９からＢＫ２にかけて検出した。調査延長は21mで、北西側に延長し、南東側では水田址１と重複する。覆土は暗褐色土が主体となり、底部には砂が認められた。方向はほぼ直線的でN41° Wを示し、幅380 ～180 cm・深さ80～35cmを測る。断面形は逆台形をなし、南壁の一部は平坦面を持つ。その面の直上には拳大の礫が認められた。

遺物　出土遺物は少なく、土師器（２－１・２）・須恵器（２－３）・内耳土器（２－４）、打製石斧（５－８・９）がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑤　**溝址５**（挿図12、第２・５図、図版５・６）

遺構　南東側調査区南西部と北西側調査区南西部ＡＶ44からＢＥ37にかけて検出した。南東側で調査延長10.0m・幅80～50cm・深さ29～11cm、北西側で調査延長 7.6m・幅78～40cm・深さ９～５cmを測り、両側に延長する。方向はN46° Wを示し、断面形は逆台形をなす。覆土は灰色砂質土（灰色砂土混じり）の一層である。

遺物　出土遺物は少なく、土師器片・須恵器片・中世陶器片があるが図示はできない。他に有肩扇状形石器（５－10）がある。

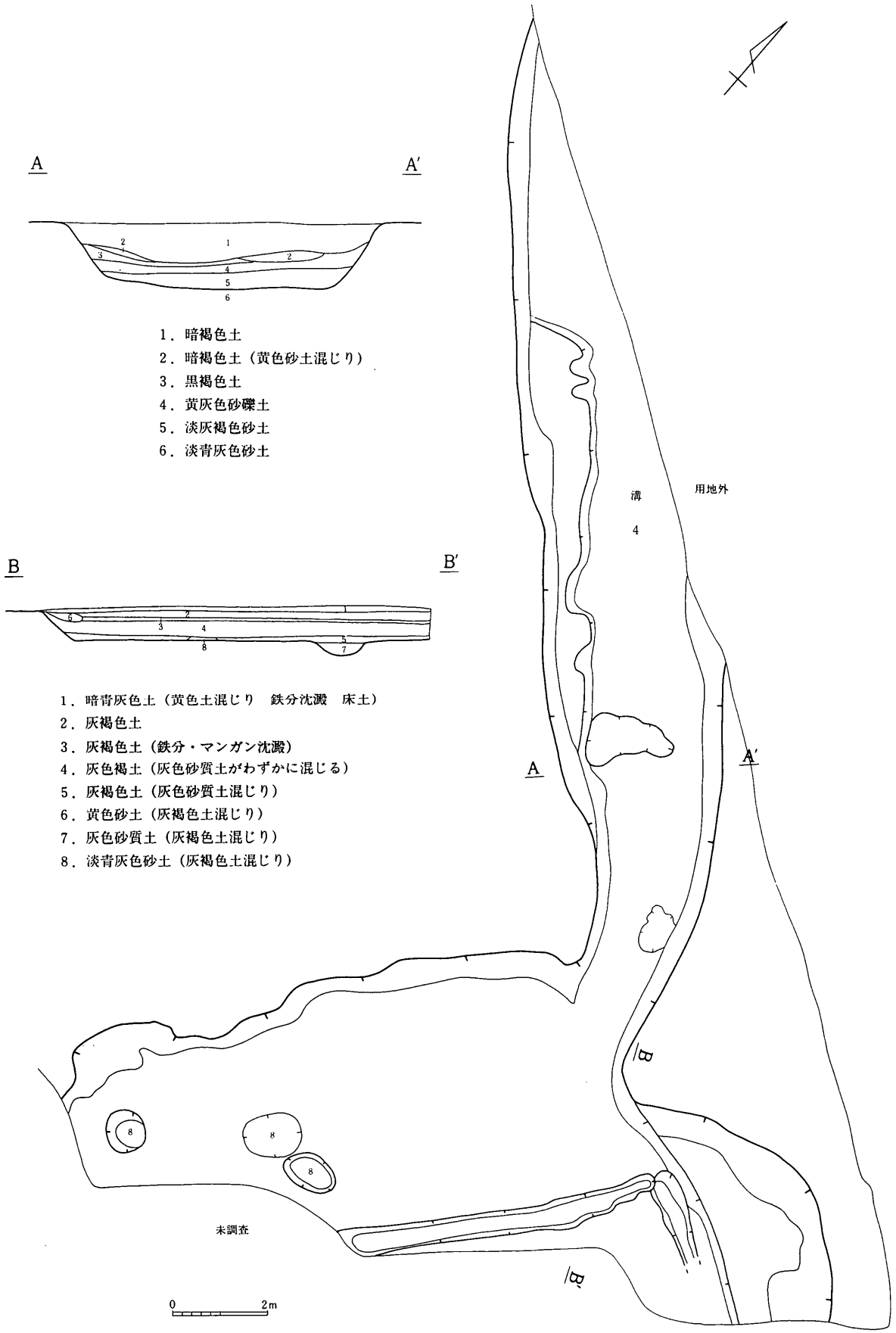
出土遺物が少なく確定した時期を示せないが、中世に位置づく可能性が高い。

⑥　**溝址６**（挿図12、図版６・７）

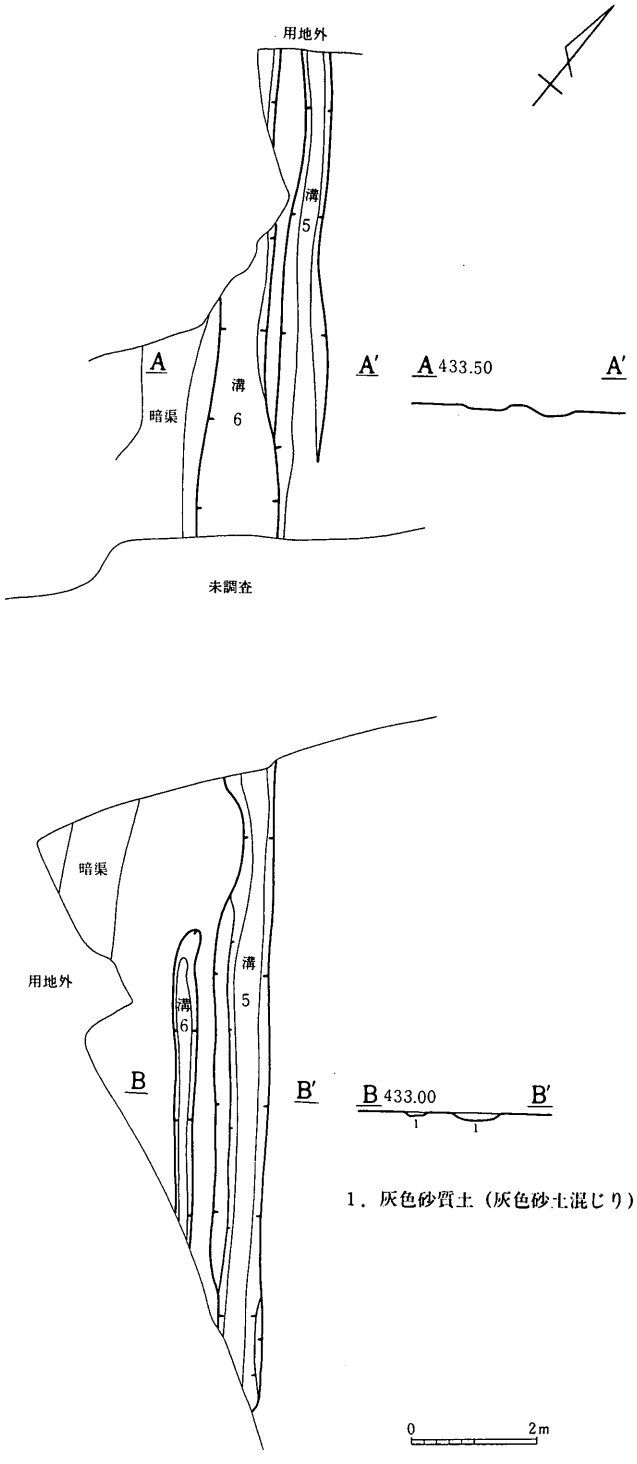
遺構　南東側調査区南西部と北西側調査区南西部ＡＶ42からＢＤ38にかけて検出した。南東側で調査延長 4.4m・幅33～28cm・深さ９～６cm、北西側で調査延長 4.8m・幅 156～94cm・深さ７～２cmを測り、両側に延長する。南東側調査区北東側で2.3 m検出できない部分があった。方向はN46° Wを示し、断面形は逆台形をなす。覆土は灰色砂質土（灰色砂土混じり）の一層である。両調査区で遺構の状況が異なり未調査部が存在するが、方向や覆土の状況から同一遺構と判断した。

遺物　出土遺物は極めて少く、土師器片１点があるのみである。

出土遺物が少く確定した時期を示せないが、覆土の共通性から溝址５と近接した中世に位置づく可能性が高い。



挿図11　溝址４・水田址１



挿図12　溝址５・６

⑦　**溝址８**（挿図10、第２図、図版８）

遺構　北西側調査区中央部ＢＥ42～ＢＧ40にかけて検出した。調査延長は 7.3mで、両側に延長するが、南東側調査区では検出できなかった。幅27～10cm・深さ27～10cmを測り、方向は緩く曲がりながらN47°Wを示す。断面形は逆台形を示す。覆土は黄色土（灰褐色砂土混じり）の一層である。

遺物　出土遺物は極めて少なく、土師器片２点があるのみである。

出土遺物が少なく確定した時期は示せない。しかし、土の堆積状況からみれば、溝址３が埋まった後に堆積した層位と覆土が共通するので、中世以降に位置づく可能性が高い。

⑧　**溝址９**（挿図10、第２図、図版８）

遺構　北西側調査区中央部ＢＤ41～ＢＧ39にかけて検出した。調査延長は 7.4mで、両側に延長するが、南東側調査区では検出できなかった。幅36～25cm・深さ18～12cmを測り、方向はＮ38°Ｗを示す。断面形は逆台形を示す。覆土は灰褐色砂利が主体となり、上層は水田の床土と考えられる鉄分の沈殿する灰褐色土がある。

遺物　出土遺物は少なく、土師器片・須恵器片・中世陶磁器片があるのみである。

出土遺物と層位から中世に位置づけられる。

(3) 土坑・柱穴

土坑は番号を付したものが23基あり、個々の説明は省略して挿図13～17・第１表で表した。調査時に一貫した方針を欠いたので、その他の穴の中にも土坑とすべきものがあったにもかかわらず、すべてに番号が付されていない。

分布状況は、水田の造成を受けている南東側調査区北西側・南東側と、溝址が集中する北西側調査区南西側・南東側調査区南西側にはみられない。そのほかの箇所はほぼ全域に分布するが、とくに北西側調査区中央部から北東側に集中する。遺構の状況を考慮すれば、削平された南東側調査区北西側にも分布していたと考えられ、今次調査地区の中央部から北側が分布域といえる。

時期は、平安時代に位置づく１基を除けば、古墳時代後期と中世と考えられる。前者は４基が南東側調査区の中央部から東側に散在し、後者は土坑の分布域全面に認められる。中世と想定した土坑からは少数の例外を除いて遺物が出土しなかった。中世と判断したのは、竪穴住居址・柱穴と覆土が共通することによった。

特筆すべき土坑には古墳時代後期の土坑１・４がある。土坑１には完形の鉢が底に正位に置かれており、その上には礫が２個認められた。土坑４は底部に完形の坏が伏せて置かれ、その脇にも鉢が認められた。他にも、甕・鉢・坏が入れられていた。古墳時代後期に単独の土坑で完形遺物が出土する例はほとんどなく、その位置づけに調査時点から苦慮した。竪穴住居址が存在したのが削平され、住居址に付属する穴のみが残ったことも想定してみた。最終的に土坑としたのは、付近に中世の竪穴住居址が存在することから、いくら水田の造成で削平されているとはいえ古墳時代の竪穴住居址がすべて削られてしまったとは考えにくいこと。土坑の検出状況からみて単独で存在すると考えられること。等からである。性格であるが、遺構の状況からみて祭祀的性格が強いと考えられる。

平安時代の坏が底から出土した土坑23は、該期遺構はこの１基のみである。検出位置は北西側調査区西端で土坑の主体的な分布域とは異なる。西側の用地外に平安時代の竪穴住居址等の遺構が広がっていることも考えられる。

土坑２・３は、検出した段階では土坑と判断した。掘り下げ調査を実施し、土層断面の観察したところ、規格性のない堀方や自然に埋まった土層から風倒木の痕跡と考えられる。

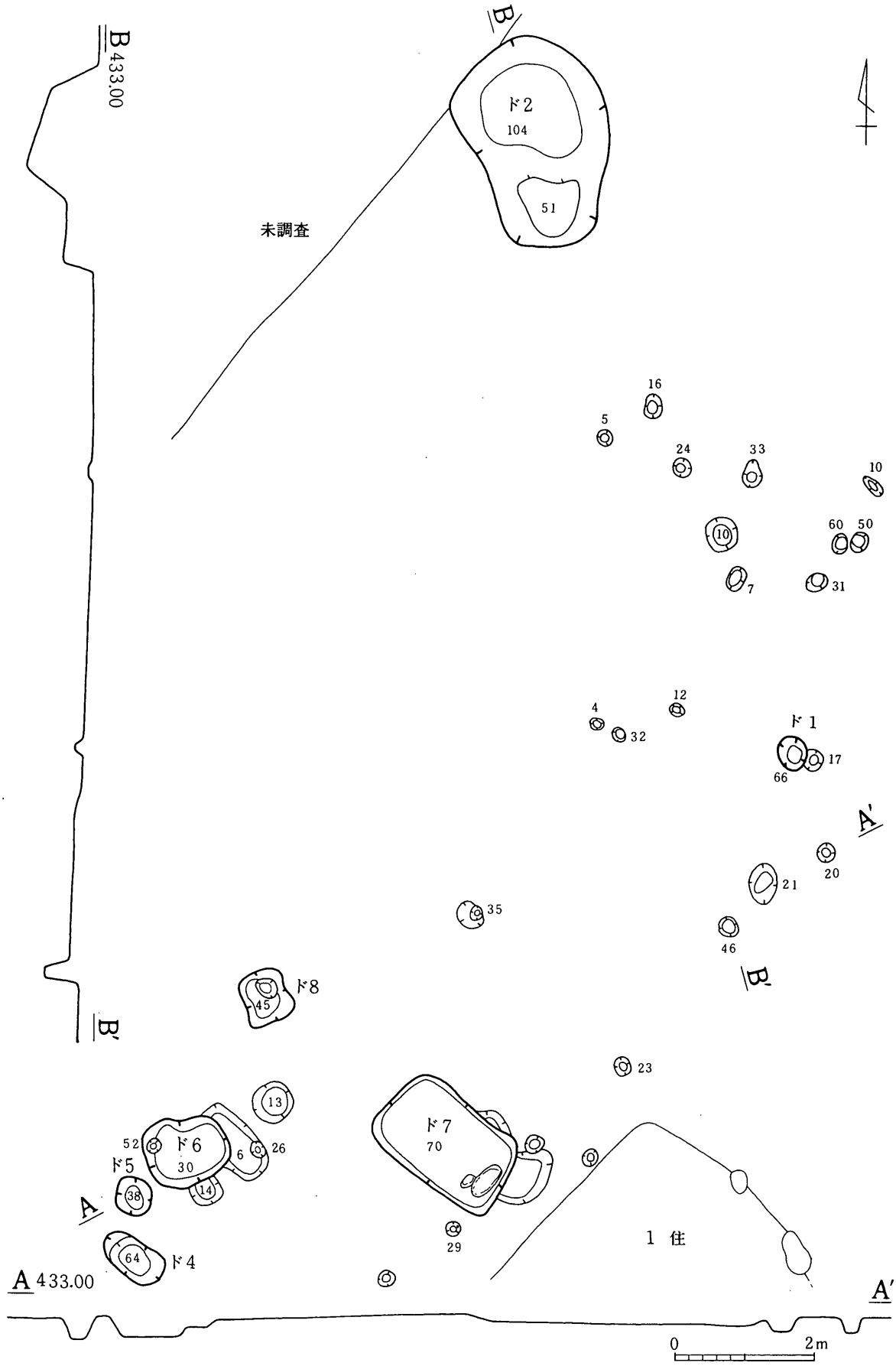
出土遺物は土器があり、何も出土しない土坑が多い。土器で主体となるのは古墳時代後期の土師器で、坏・鉢の形態から後期前半に位置づけられる。

柱穴は土坑と同様に今次調査地区の中央部から北側に分布する。遺物の出土がないために、確定した時期を示すことはできないが、覆土や遺構・他遺構との関連から中世に位置づくと考えられる。遺構の

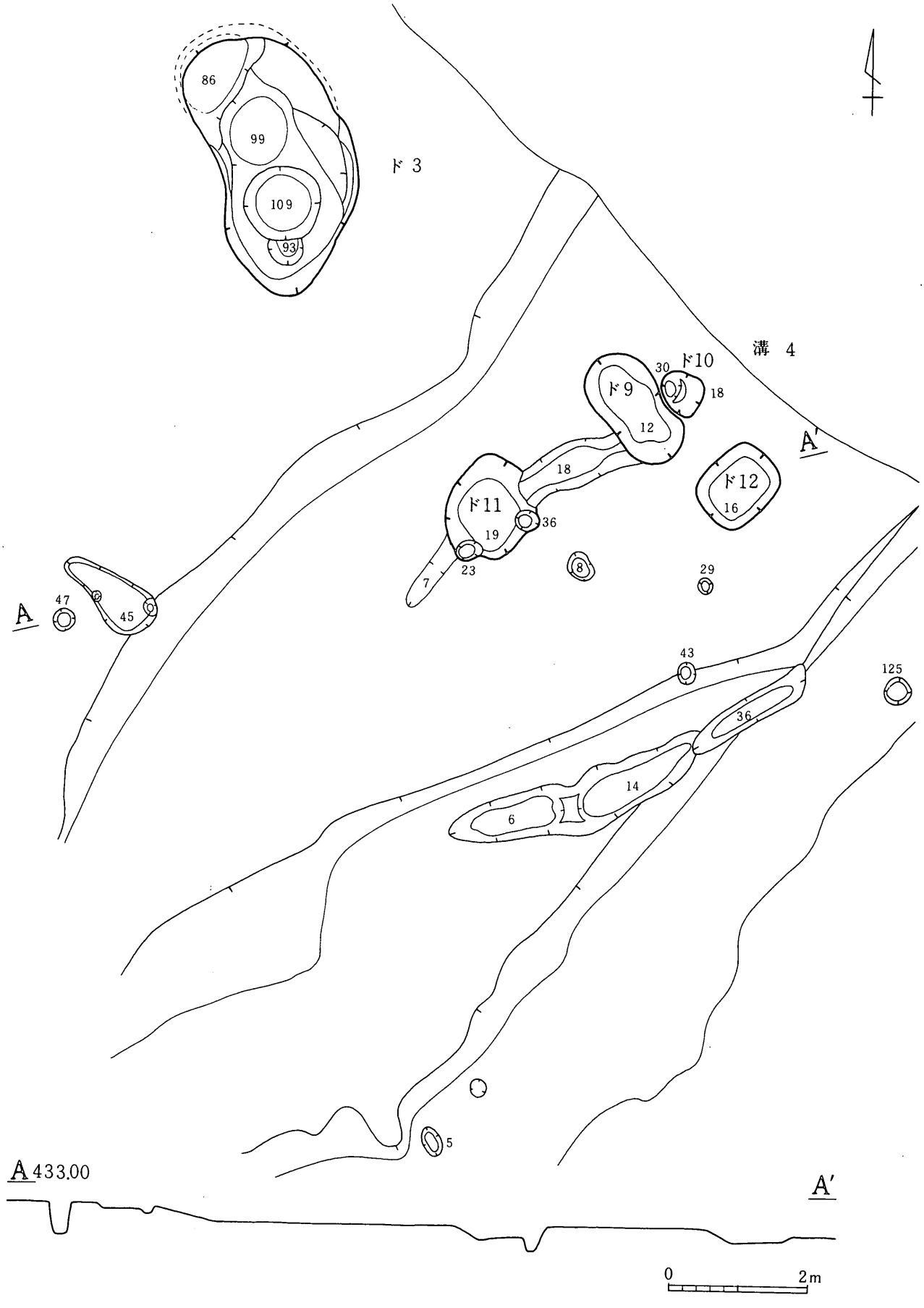
性格は、掘立柱建物址の柱穴と考えられるが、集中して検出されたために建物址の並びとして把握するのができず、柱穴としてとらえたのみである。建替や重複等により何回にもわたった結果と考えられる。

第1表　土坑観察表

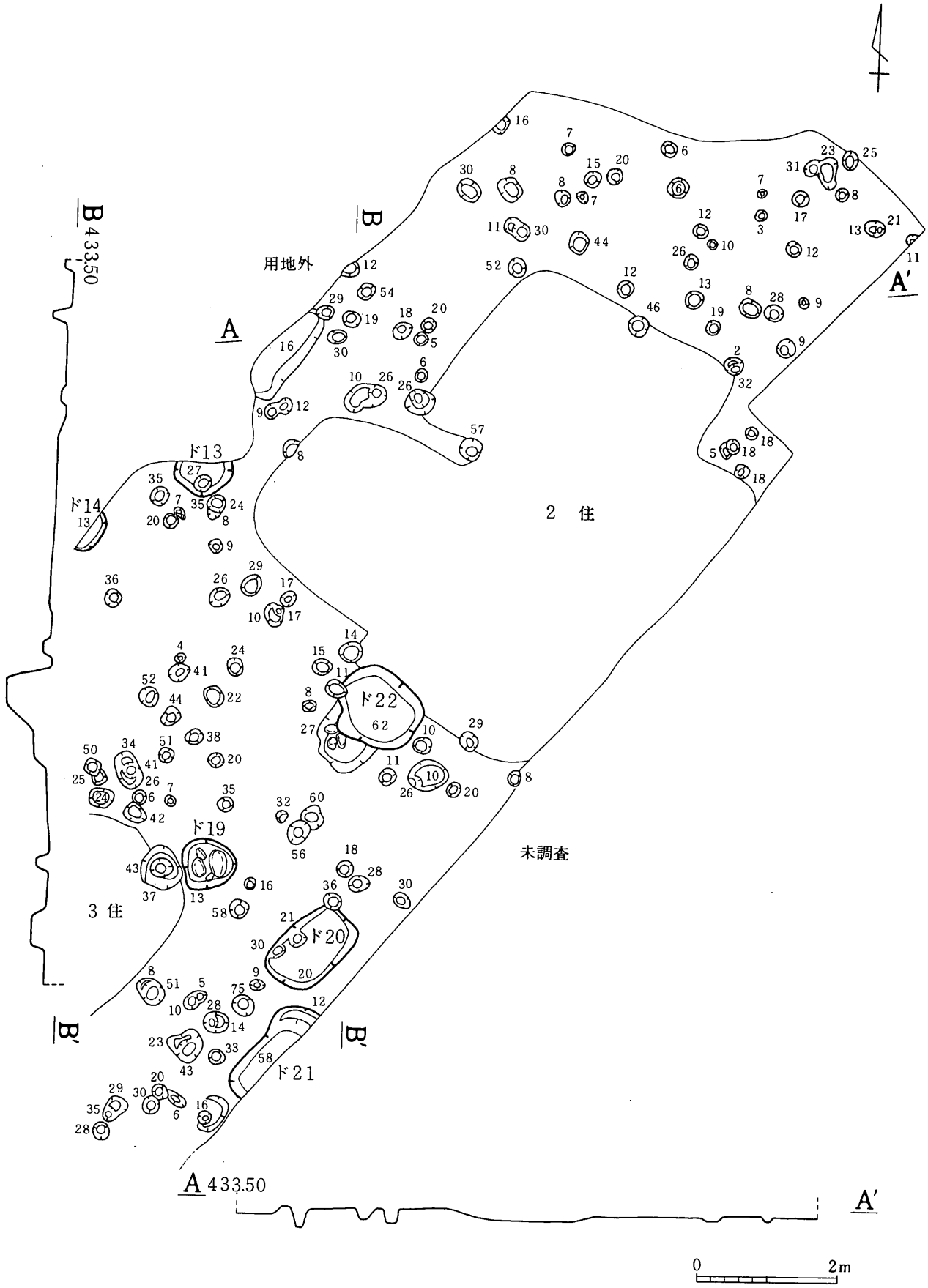
番号	図版No.	検出位置	規模(長/短/深cm)	形　態	覆　土	時　代	重複遺構	備　考
1	挿図13	BF1	40× 40×66	円形	黒褐色土	古墳後		完形土器出土
2	挿図13	BJ・K49	300×192×104	楕円形		中　世		風倒木痕
3	挿図14	BG3・4	376×193×103	不整形	灰黒色土	中　世		風倒木痕
4	挿図13	BB46	88× 57×64	不整形	黒褐色土	古墳後		完形土器出土
5	挿図13	BC46	57× 49×38	楕円形	黒褐色土	古墳後		
6	挿図13	BC47	106× 88×30	丸みを帯びた長方形	黒褐色土	中　世		
7	挿図13	BC48・49	199×122×70	隅丸長方形	黄褐色土			
8	挿図13	BD47	77× 64×45	丸みを帯びた長方形		中　世		
9	挿図14	BE6BF5・6	198× 90×12	楕円形	黒褐色土			
10	挿図14	BF6	62× 62×30	不整円形	黒褐色土	古墳後		
11	挿図14	BE4・5	142×123×19	丸みを帯びた方　形	黒褐色土			
12	挿図14	BE6	108× 86×16	楕円形	黒褐色土			
13	挿図15	BK43	83× －×27	－		中　世		
14	挿図15	BK42	64× －×13	－		中　世		
15	挿図16	BI41	90× 61×14	丸みを帯びた長方形	暗灰色土	中　世		
16	挿図16	BI41	－× 72×25	－		中　世		
17	挿図16	BH40・41	－× －×20	－		中　世		
18	挿図16	BH41	164× 74×12	隅丸長方形	暗灰色土	中　世		
19	挿図15	BH43	74× 66×13	丸みを帯びた方　形	暗灰色土	中　世	3号住居址	
20	挿図15	BH44	130× 83×20	隅丸長方形	暗灰色土	中　世		
21	挿図15	BG44	180× －×58	－	黄灰褐色	中　世		覆土に礫
22	挿図15	BIJ44・45	120×108×62	楕円形		中　世	2号住居址	覆土に礫
23	挿図16	BA37	66× 60×22	楕円形		平　安		


B
B 433.00
ド2
104
51
未調査
16
5
24
33
10
10
60
50
7
31
12
4
32
ド1
17
66
A'
20
21
35
46
B'
ド8
45
B'
23
13
ド7
70
52
ド6
30
6
26
ド5
38
14
A
29
1 住
64
ド4
A 433.00
A'
0
2m

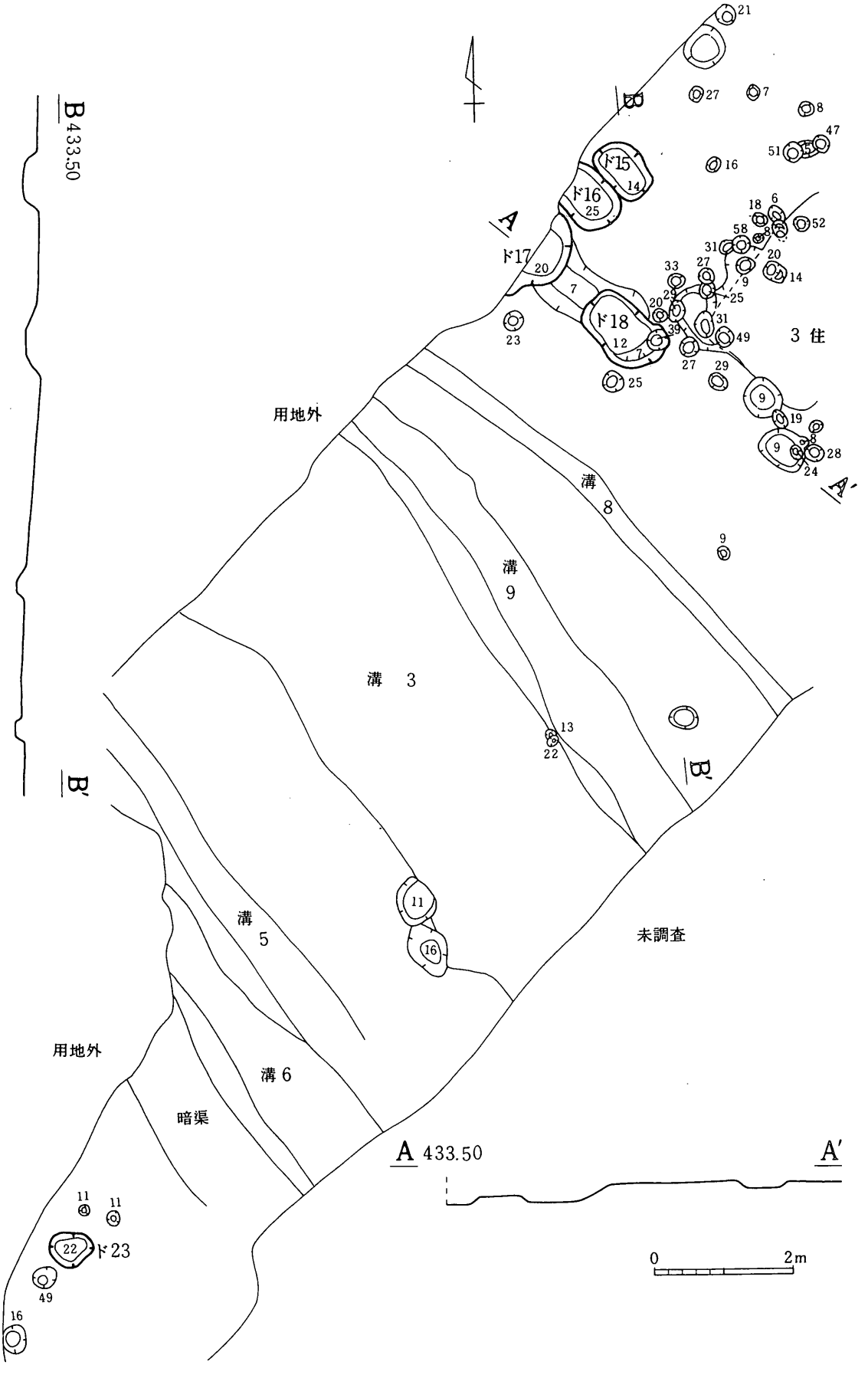
挿図13　土坑・柱穴(1)


86
99
109
93
ド3
溝 4
ド10
30
18
ド9
12
A'
18
ド12
16
ド11
19
36
23
7
8
29
A
47
45
43
125
36
14
6
5
A 433.00
A'
0
2m

挿図14　土坑・柱穴(2)

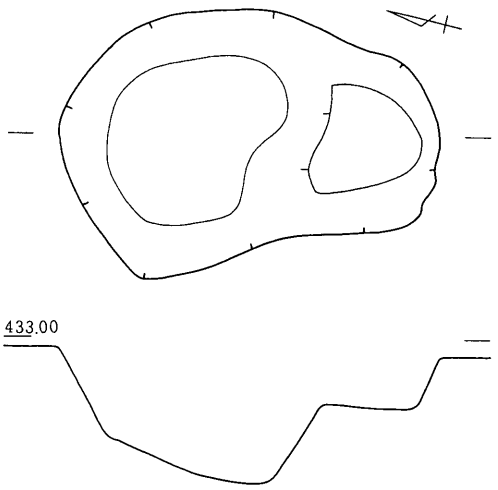


挿図15　土坑・柱穴(3)

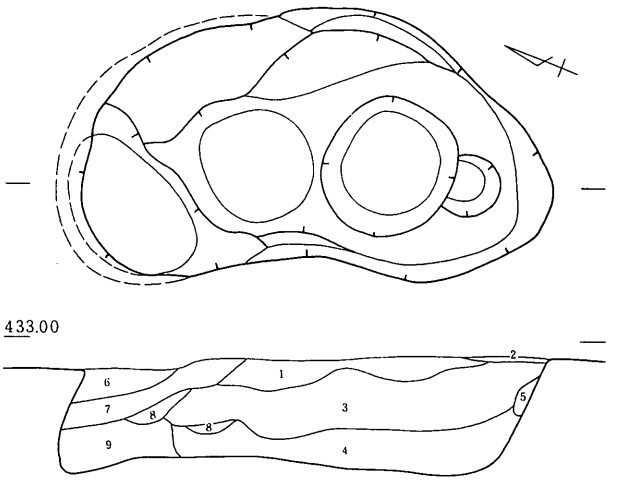

B 433.50
B'
A
A'
ド15
ド16
ド17
ド18
ド23
3 住
用地外
溝 8
溝 9
溝 3
溝 5
溝 6
暗渠
未調査
A 433.50
0
2m

挿図16　土坑・柱穴(4)

土坑 2

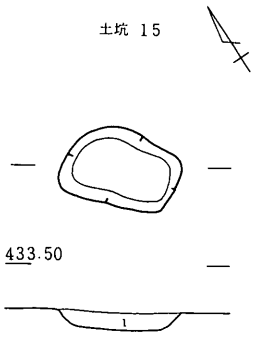


土坑 3



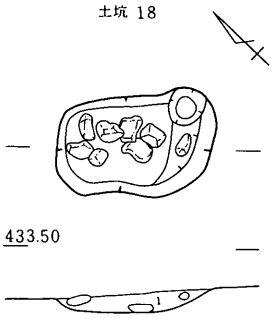
1．灰黒色土
2．黄色土（床土）
3．黄褐色土
4．褐色土（20～10㎜の石が多く入る）
5．褐色土
6．灰黒色土・黄褐色土（灰白砂土混じり）
7．黄白色砂土（灰黒色土・黄褐色土混じり）
8．黄褐色土（灰黒色土混じり）
9．黄褐色土（黄白色砂土混じり）

土坑 15



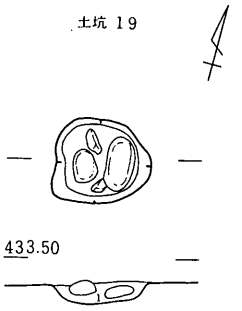
1．暗灰色土

土坑 18



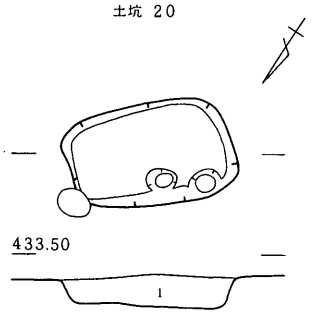
1．暗灰色土（黄色土混じり）

土坑 19



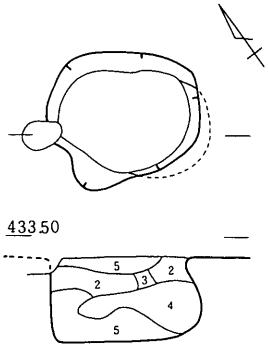
1．暗灰色土

土坑 20



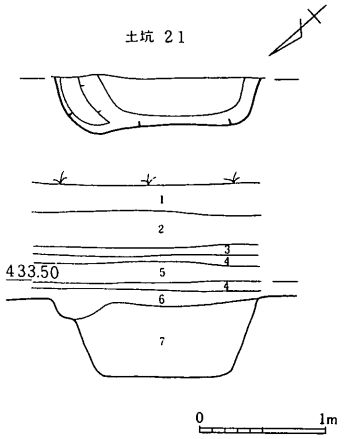
1．暗灰色土

土坑 22



2．黄色土
3．黄色土（暗灰色土混じり）
4．暗灰色土（黄色土混じり）
5．暗灰色土（黄色土が多く混じる）

土坑 21



1．耕土（灰色土）
2．黄色土（灰色土混じり）
3．暗青灰色土
4．暗青灰色土（鉄分沈澱層）
5．暗青灰色土（わずかに鉄分が沈澱する）
6．暗灰色土
7．黄灰褐色土

挿図17　土坑

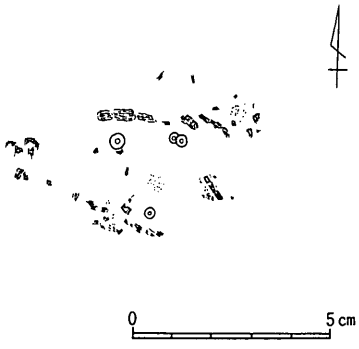
（4）その他の遺構

①　火葬墓１（挿図18、図版11）

遺構　北西側調査区北東側ＢＬ45・46にかけて検出した。２号住居址の覆土を掘り下げ調査中に、焼土・炭・焼骨・銭が確認され、火葬墓であることが判明した。２号住居址覆土との違いの見極めが難しかったので、炭が分布する範囲を遺構と把握した。中世の２号住居址を切る。おおよそ70×40cmの楕円形を呈し、炭を主体にわずかに焼土・焼骨が認められた。六導銭は火を受けて脆くなっており、２枚重なったものが２組あって、合計６枚が出土した。遺構の状況から判断して、別の場所で火葬にしたものを埋葬したものと考えられる。

遺物　中世の渡来銭が６枚出土した。

出土遺物から中世に位置づけられる。



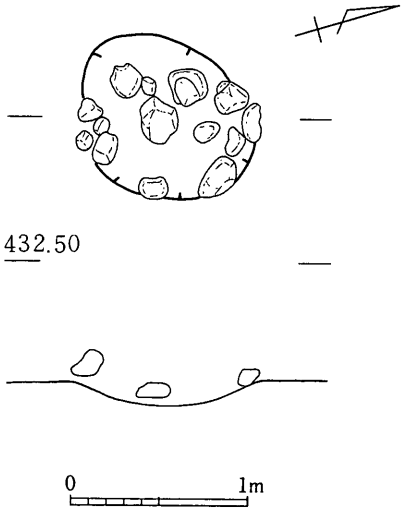
挿図18　火葬墓１

②　集石１（挿図19、図版11）

遺構　南東側調査区東端ＢＡ７、水田址１の下層で26～10cmの礫16ヶが検出され集石とした。平面形は108 ×88cmの楕円形で、皿状に窪んでおり、その範囲の床面直上に礫が認められた。

出土遺物はない。

切り合い関係から中世に位置づけられる。



挿図19　集石１

③　水田址１（挿図11、第３図、図版12）

遺構　南東側調査区東端ＡＸ６からＢＢ12にかけて検出した。南側の用地外に連続する。中世の溝址４と集石１と重複する。当初当該地が12×８ｍの範囲で落ち込みが認められ、遺構の性格を確定できないまま掘り下げ調査を実施した。壁高は36～23cmを測り、緩やかな壁面をなす。北東側では壁が２段をなし、内側の壁高は10～５cmを測る。底はほぼ平坦で、東端に幅64～26cm・深さ16～10の小溝がＬ字状に認められた。土層は水平の堆積をなし、自然による埋没は考えられない。水田址と判断したのは、土層観察で水田耕土や床土と考えられる層位が認められたことからである。

遺物　出土遺物は土師器・須恵器・中世陶器・打製石斧があり、天目茶碗１点（３－19）を図示した。出土遺物から中世に位置づけられる。

Ⅳ まとめ

今次調査によって検出された遺構・遺物はすでに述べてきたとおりである。時間等の制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果・問題点を指摘してまとめとしたい。

古墳時代は祭祀的色彩の強い土坑が調査された。遺構の項でも記述しておいたが、古墳時代後期で土坑に土器がいれられる例がほとんどないだけに、その位置づけに苦慮した。土器を祭祀的な意図を持って埋納したと考えられる。

当地方で古墳時代の祭祀遺構として把握された例に鼎の天伯Ａ遺跡がある。竪穴住居址と近接した浅い窪地に、土器を埋めた穴が調査されている。上屋を想定される柱穴も検出されてはいるが、規則性はなく建物址としては把握できなかった。多量の石製模造品類も出土しており、集落内でおそらく農耕に関連する祭祀が執り行われたことがうかがえる。

当遺跡では、竪穴住居址は検出されず、集落域外もしくは集落内の広場的な位置づけが想定される。しかし、遺物の出土状況から見て、近接した場所に住居址等の存在する可能性は極めて高い。今次調査で祭祀遺構と判断したものは、前述した天伯Ａ遺跡とは規模等も含めて差異があり、祭祀そのものの性格差も推測させるものといえる。近接地で調査された古墳時代後期の集落には前の原遺跡があり、また、周辺地域には前方後円墳をはじめとする古墳の密集地帯でもある。そうした状況を加味する中で、今次調査地の位置づけを考える必要がある。いずれにせよ、こうした調査結果の遺跡は十分注意されているとはいえない状況であり、今後の調査に留意するとともに過去の類例を調べることによって、より一層今時調査の意義が明らかになるといえる。今後に残された課題は大きい。

中世では、竪穴住居址・土坑・柱穴等の集落に関する遺構と、用水路・水田址という生産にかかわる遺構が調査された。

集落域は、竪穴住居址と掘建柱建物址の居住施設と土坑で構成されていた。３軒の竪穴住居址は、それぞれ構造が異なっており、出土遺物もほとんどないことから、同時存在したかを検証することはできなかった。また、掘建柱建物址を構成すると想定される柱穴は、数がきわめて多く重複が認められるので、遺構としてのまとまりを把握するには至らなかった。やや狭い地域を継続して集落域としたものと考えられるが、居住施設の違いによる時期や用途の差異を、調査によって明らかにすることはできなかった。また、土坑それぞれも用途差によると考えられる形態の違いが認められた。しかし、それぞれの性格を把握するには至らなかった。

生産に関する遺構は、用水路と考えられる溝址と水田がある。当地域は、中世の新田開発にかかわって用水路が引かれたことが知られている。溝址３・４はそれとの関連が想定され、溝址５・６も主要水路から分かれた小用水路といえる。

水田址は、こうした溝址から水を引いて水の得られない台地上を水田化したものと考えられる。大半が南東側の用地外に広がっており、規模や形状を把握することはできなかったが、壁面としてとらえられた落ち込みは、造成で北西側の高い箇所を削平した痕跡といえる。その後も、現代まで水田としての

利用は連綿として続けられていたことは、用地外の壁面を観察することによって、何枚かの水田面が把握できたことによって明らかである。

遺物は断片的な資料が得られただけであるが、その中では中世の遺物が一番まとまっている。もとより、該期の全組成を示すものではないが、おおよその時期を把握することは可能である。常滑陶器甕・天目茶碗・灰釉陶器・山茶碗・内耳土器等から、室町時代を主体とすると考えられる。中世の遺構の大部分は該期を前後する時期と考えて差し支いないといえる。

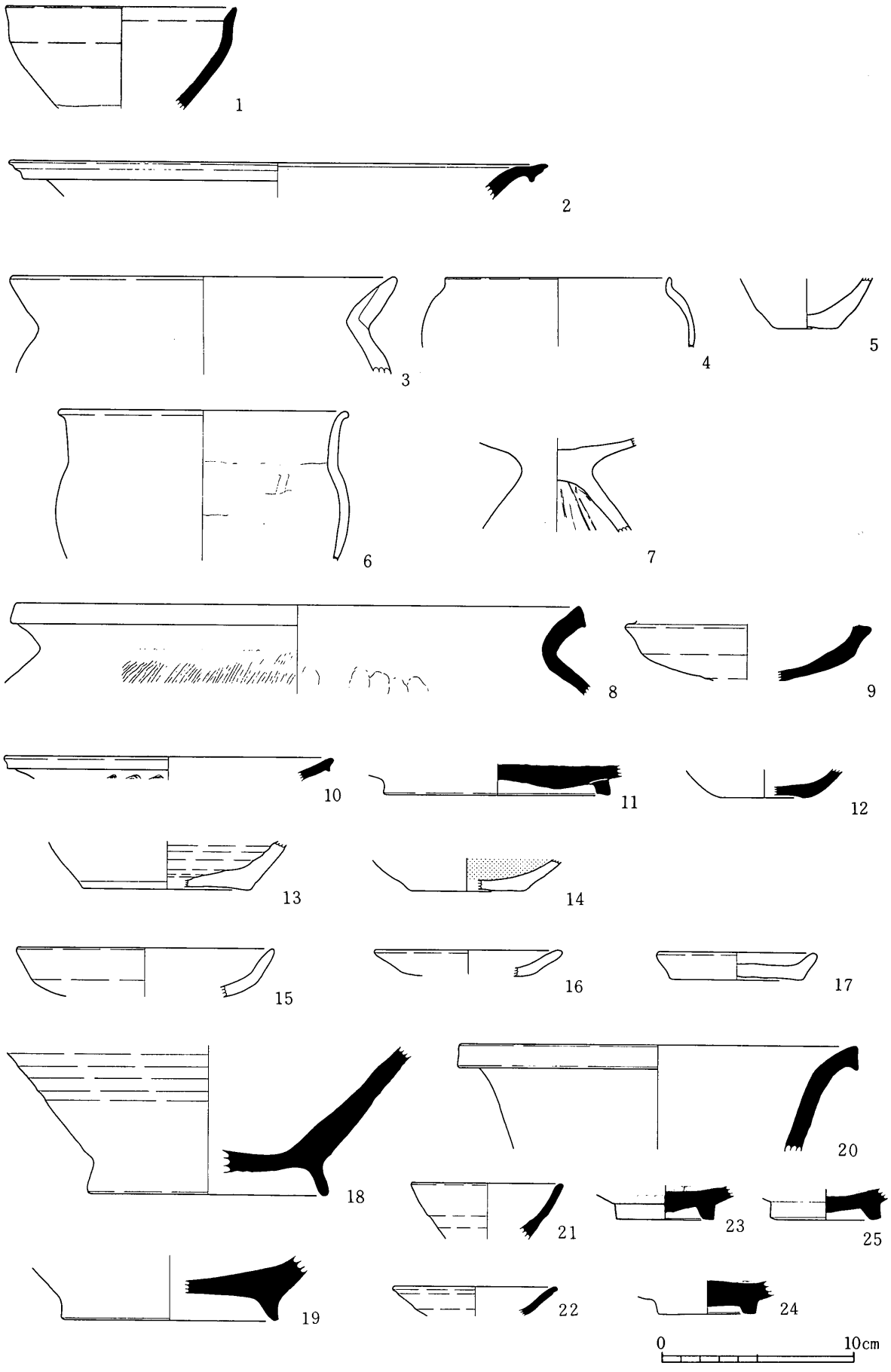
久保尻遺跡の調査で得られた問題点のいくつかを整理した。広い遺跡のほんの一部を調査しただけであるので、今次調査地点の位置づけすら十分に行えたものかはなはだ心許ない。しかし、こうした調査を積み重ねることによって徐々に明らかになっていくと考えられ、そうした通過点と考えて今次調査のまとめとする。

引用・参考文献

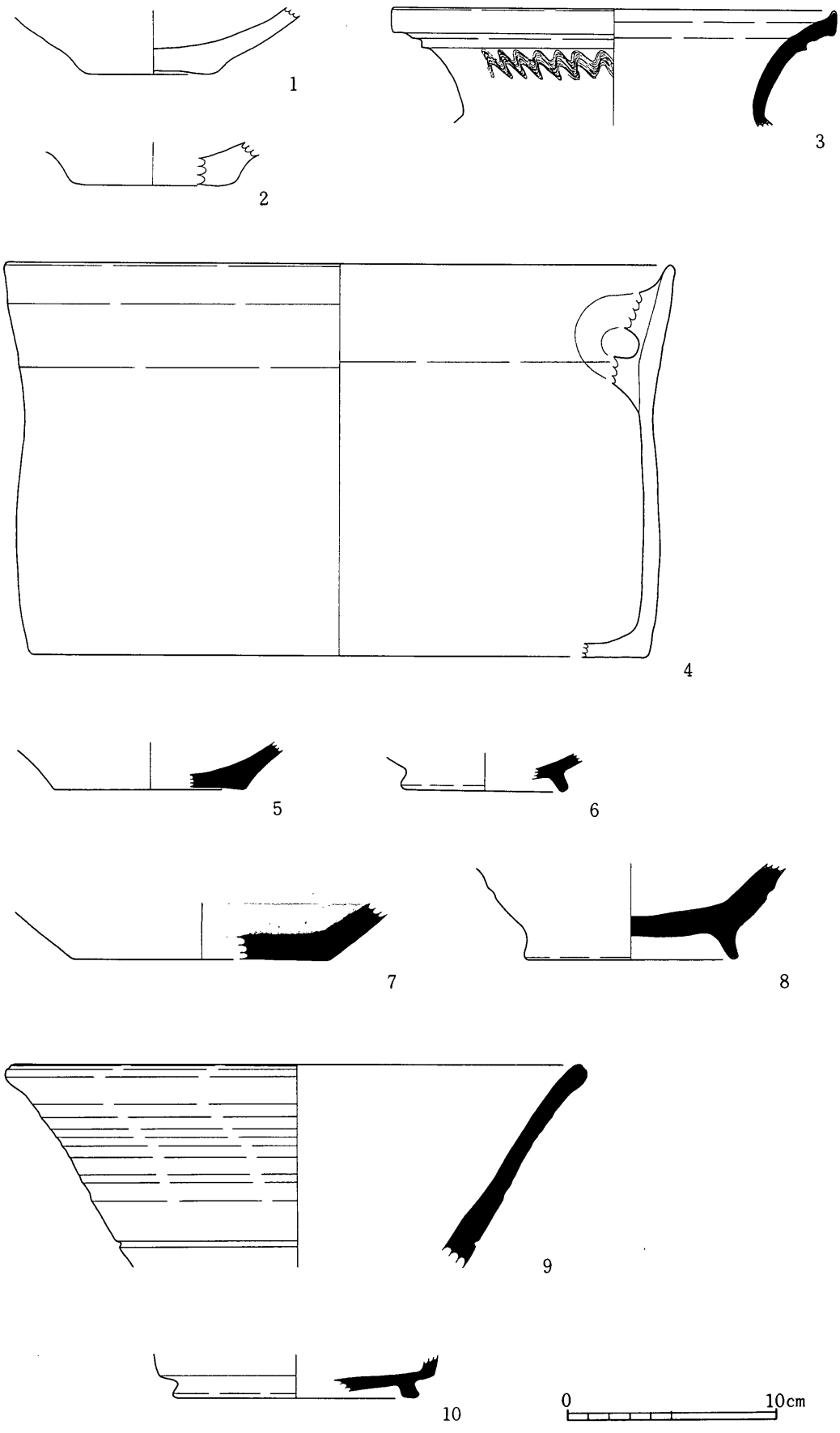
飯田市教育委員会　1975　『前の原・塚原』

飯田市教育委員会　1990　『前の原遺跡』

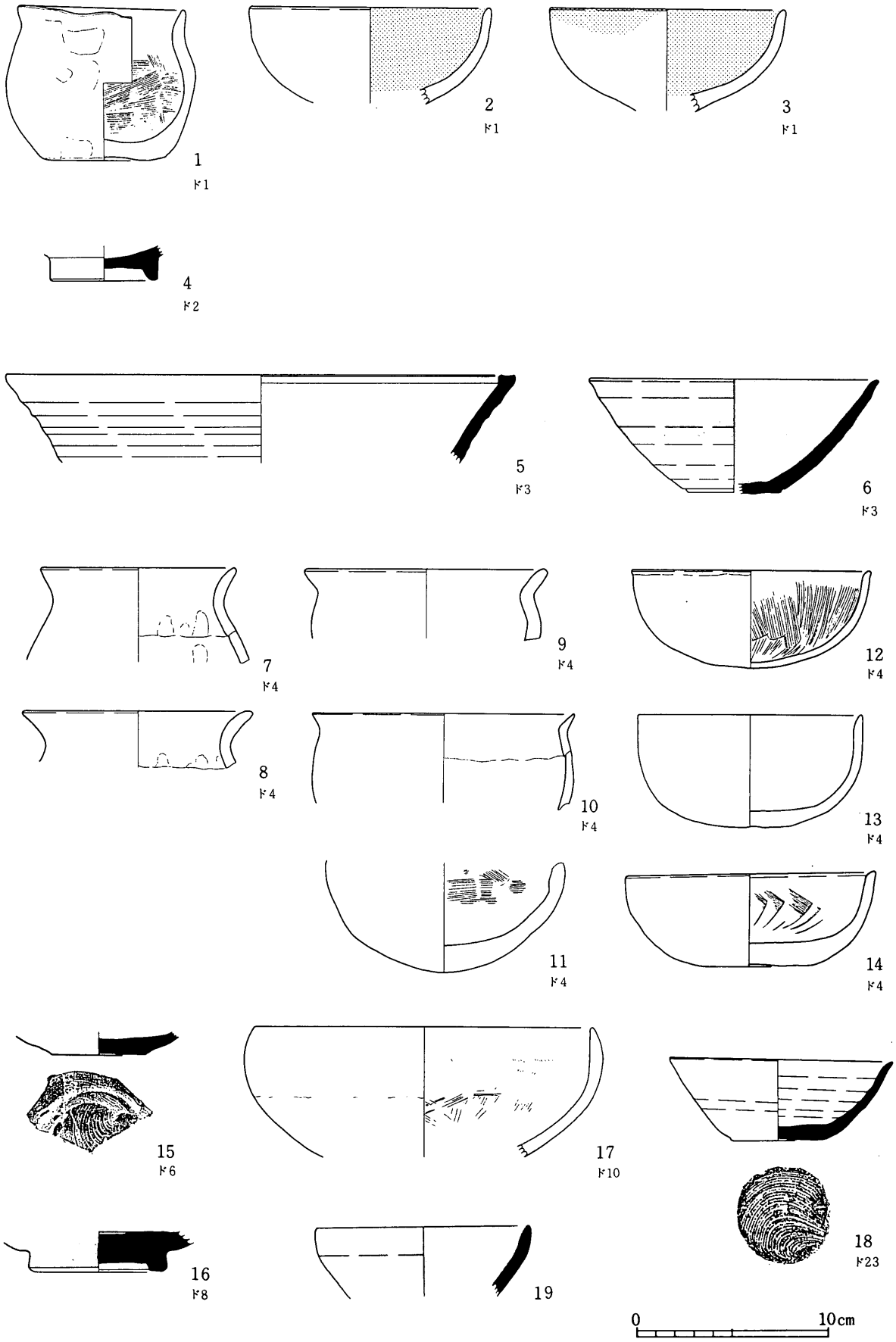
長野県教育委員会　1975　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告　下伊那郡鼎町』



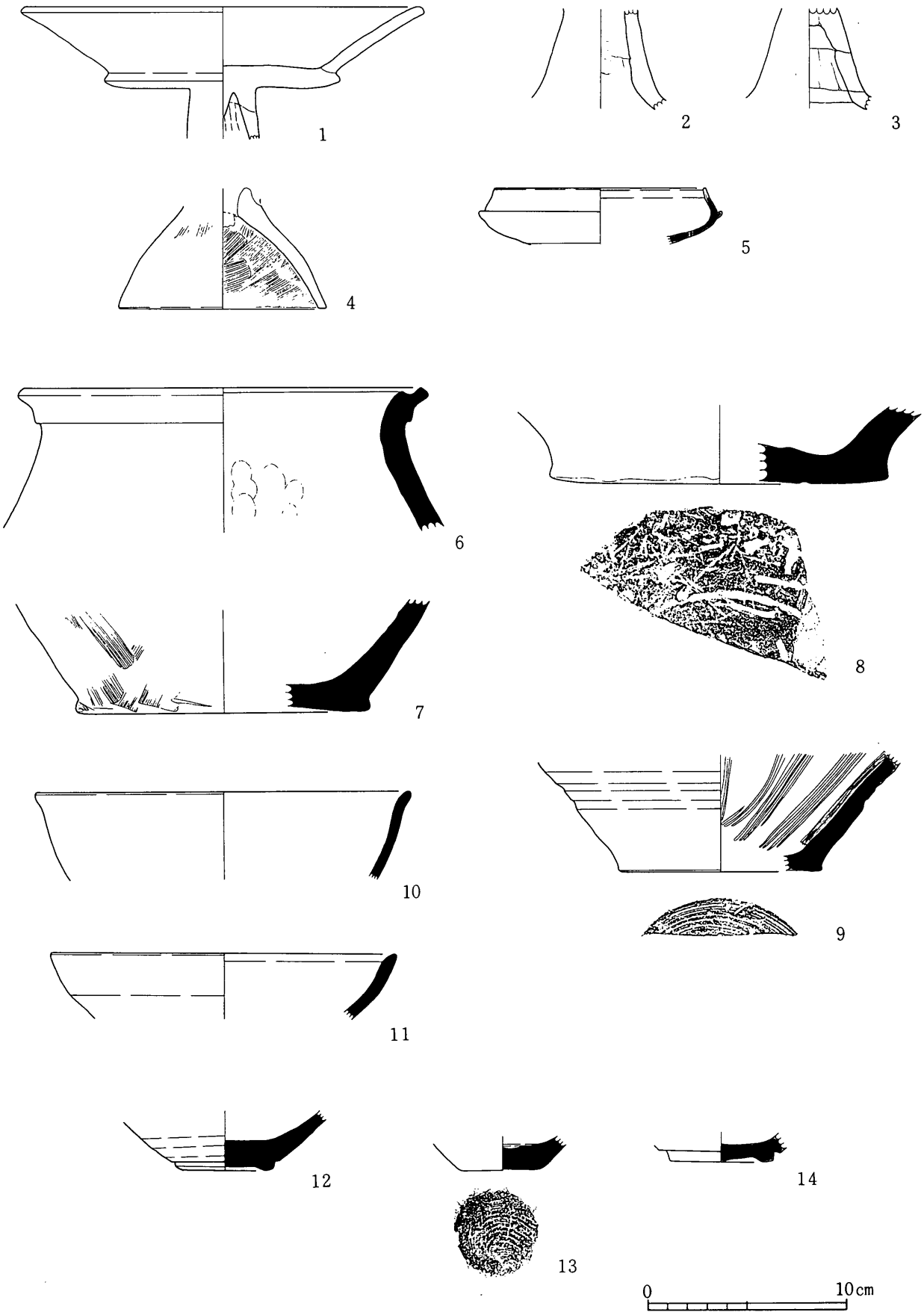
第１図　２号住居址（１）、溝址２（２）、溝址３（３～24）出土土器



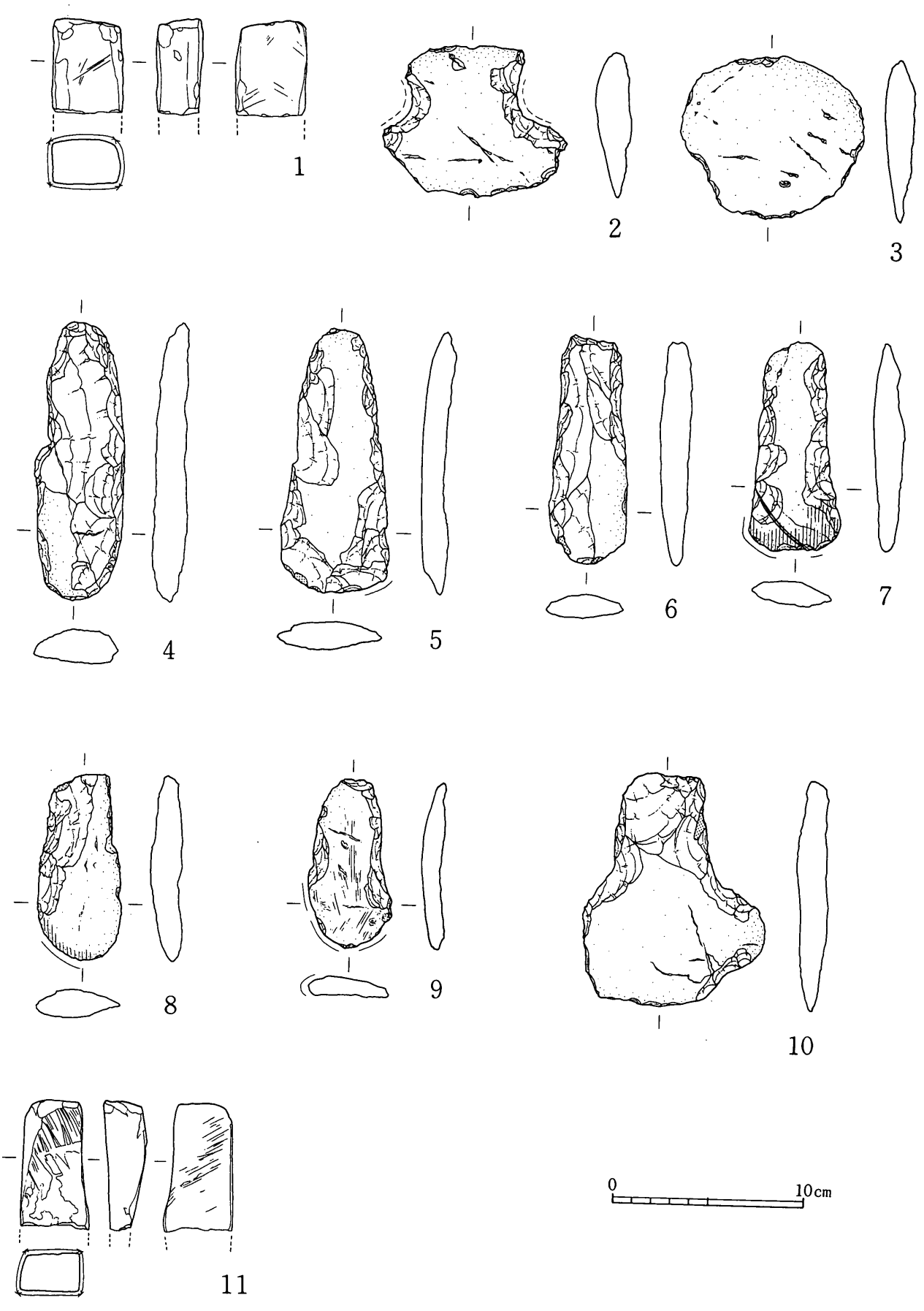
第2図　溝址4（1～4）、溝址5（5・6）、溝址7（7）溝址8（8）溝址9（9・10）出土土器



第３図　土坑（１～18)、水田址（19）出土土器

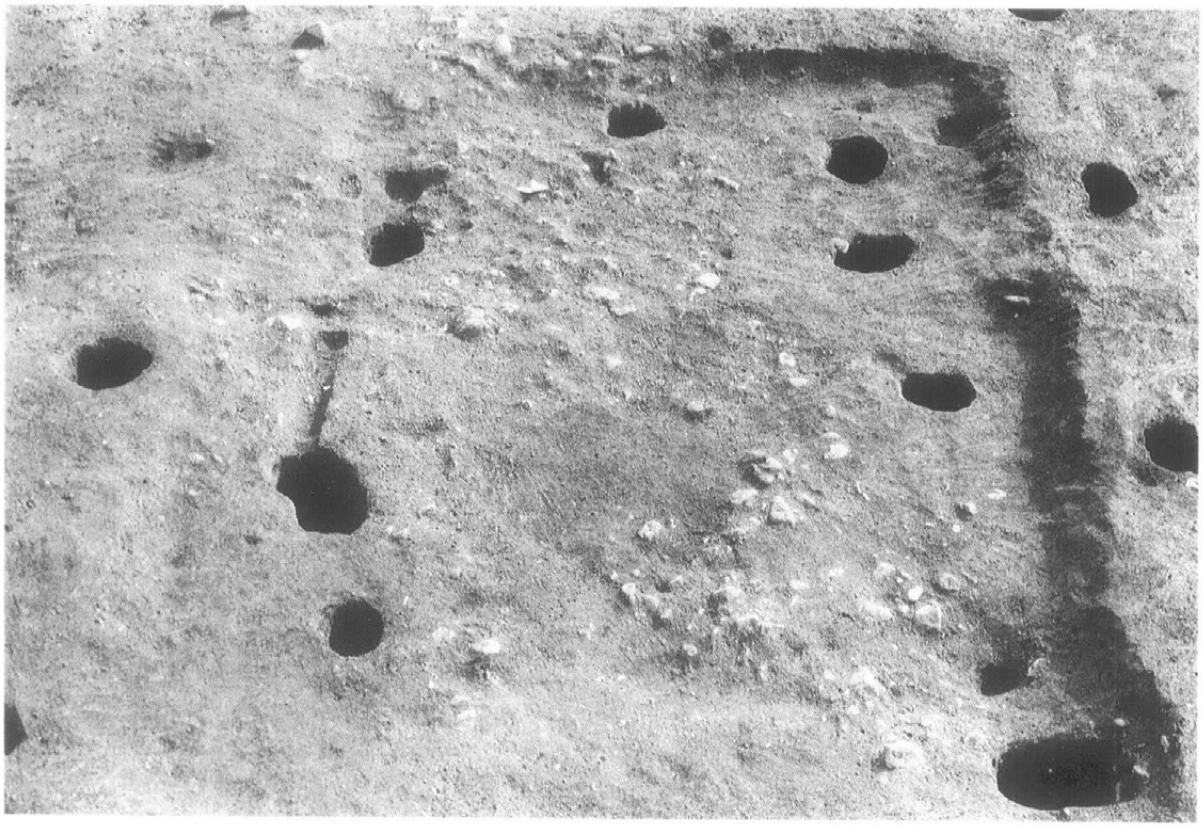


第4図　遺構外出土土器

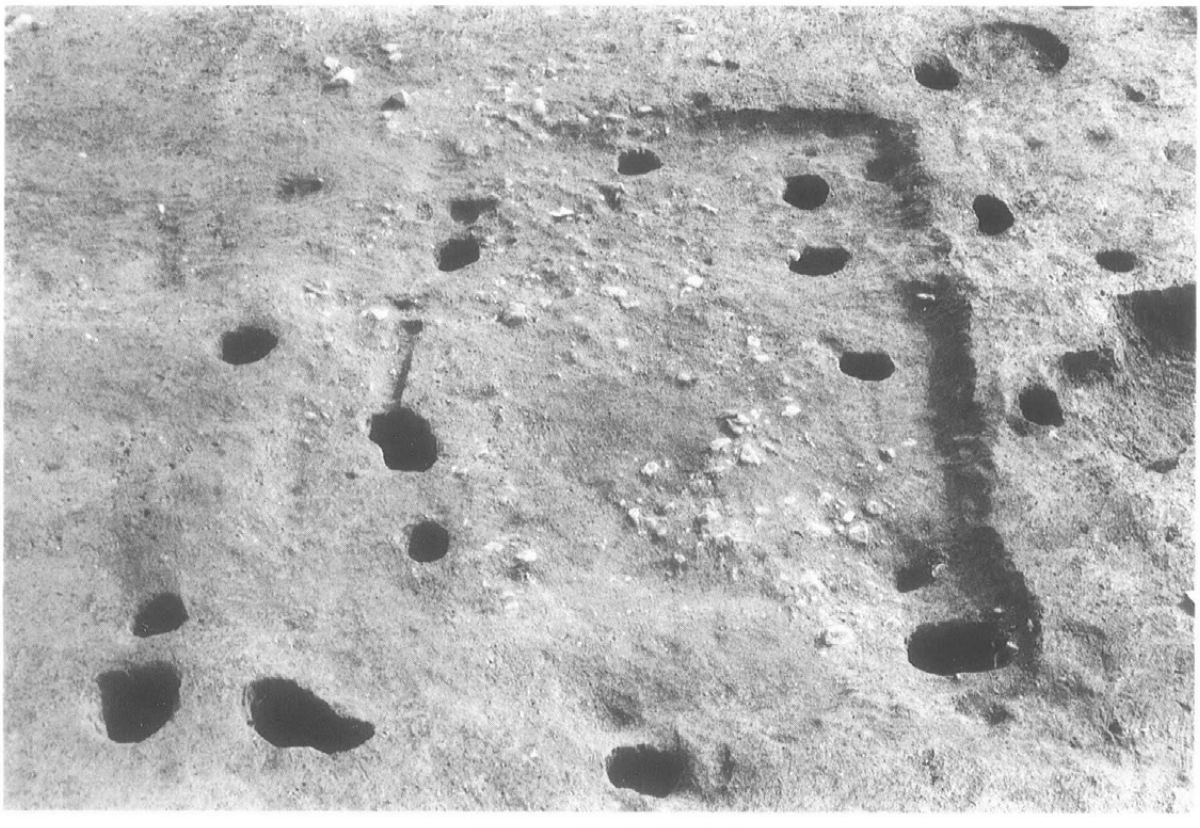


第５図　２号住居址（１）、溝址３（２～７）、溝址４（８・９）、溝址５（10）、遺構外（11）出土石器

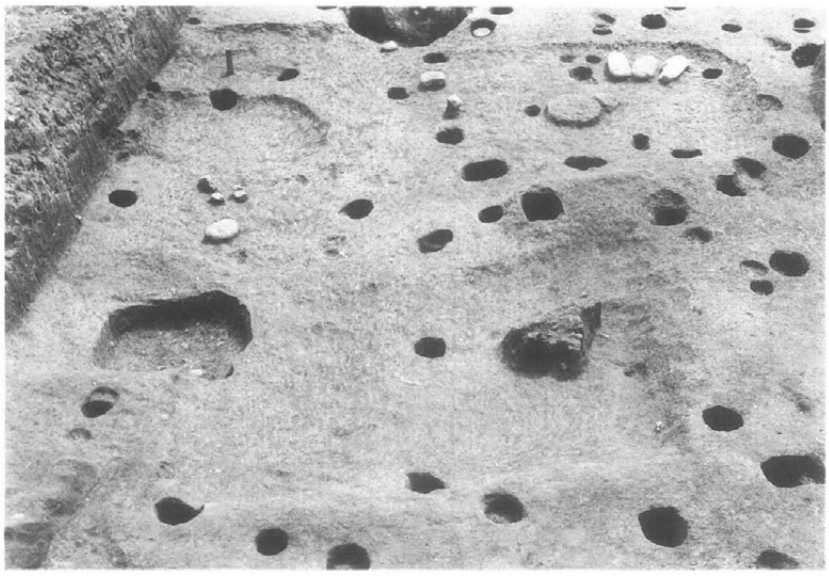
写　真　図　版



1 号住居址

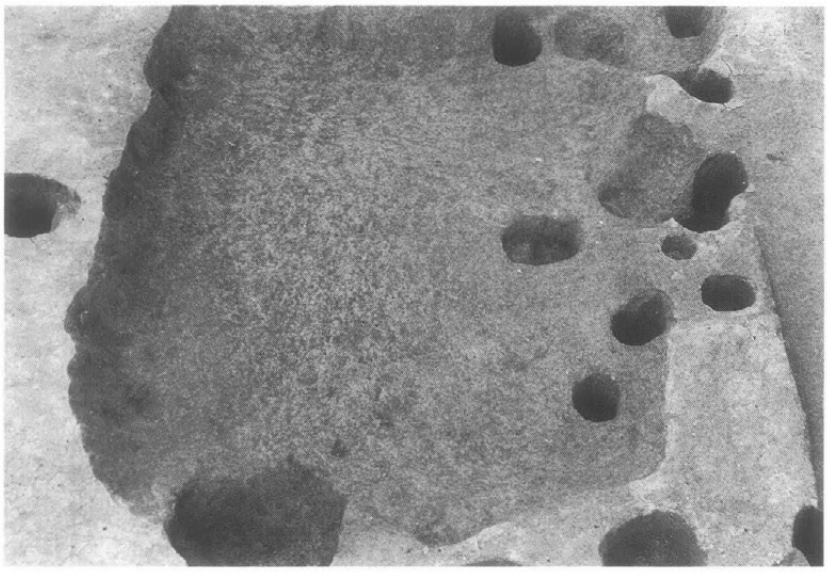


1 号住居址及び周辺柱穴



2 号住居址（北東から）

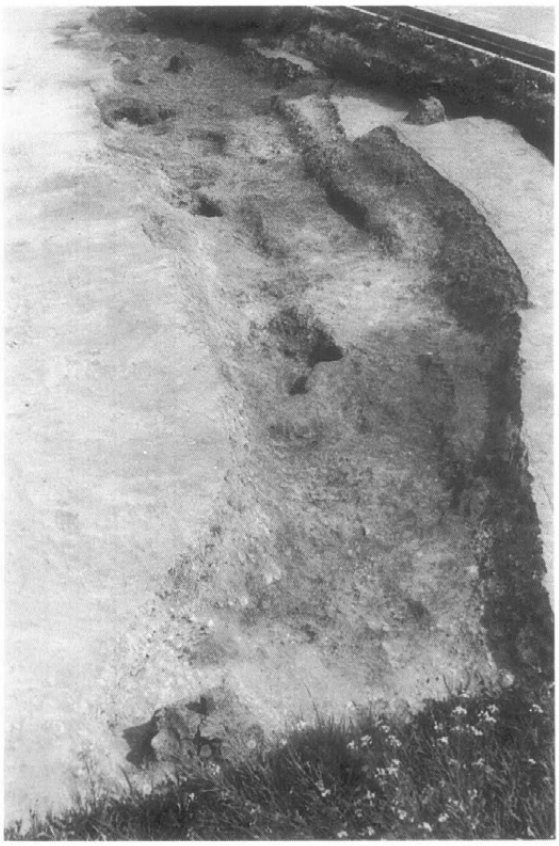
2 号住居址（南西から）



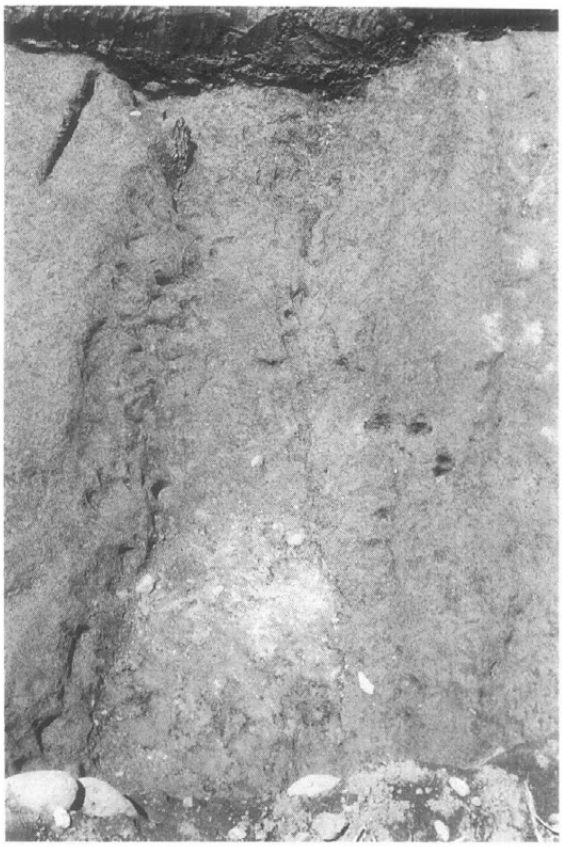
3 号住居址

溝址 1 （北西から）

溝址 2 （北西から）



南東側調査区　溝址 3（北西から）



北西側調査区　溝址 3（南東から）

北西側調査区　溝址 3（北西から）

溝址 4 （南東から）

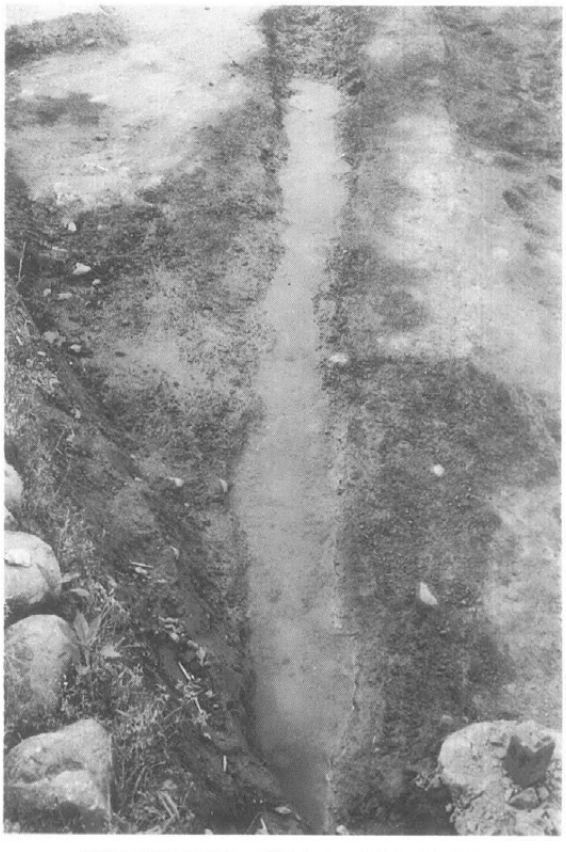
溝址 4 （北西から）

南西側調査区　溝址 5 （南東から）

南西側調査区　溝址 5 （北西から）

北西側調査区　溝址 5（北西から）

南東側調査区　溝址 6（南東から）



南東側調査区　溝址 6（北西から）

北西側調査区　溝址 6（南東から）

溝址 7（南東から）

溝址 8 （南東から）

溝址 8 （北西から）

溝址 9 （南東から）

土坑 1

土坑 4

土坑 7

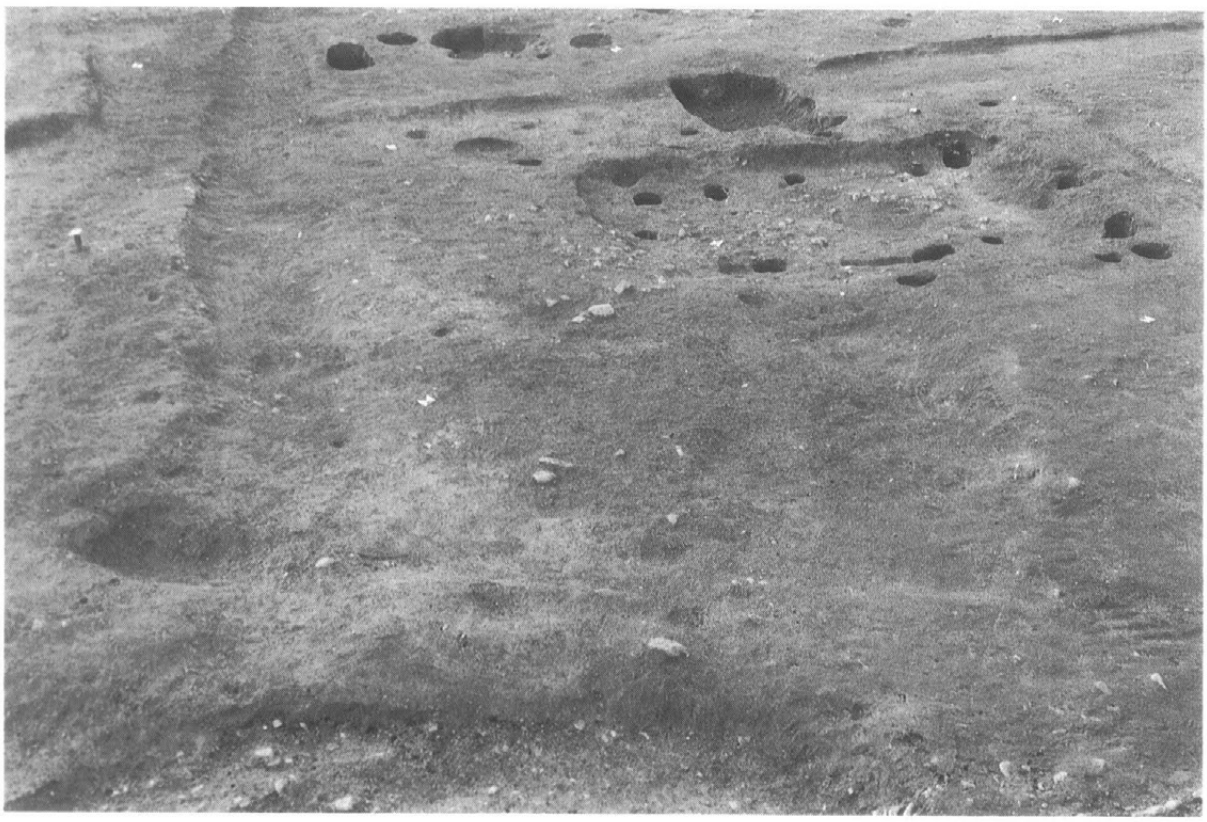
土坑23

火葬墓 1

集石 1

水田址１（南西から）

水田址１（北東から）



溝址７・１号住居址（南東から）

南東側調査区　全景（北から）

南東側調査区　全景（北東から）

南東側調査区　全景（南西から）

南東側調査区　全景（南から）

北西側調査区　全景（北東から）

北西側調査区　全景（南西から）

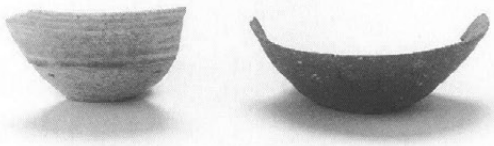
南東側調査区（上空から）

南東側調査区（斜め上空南から）

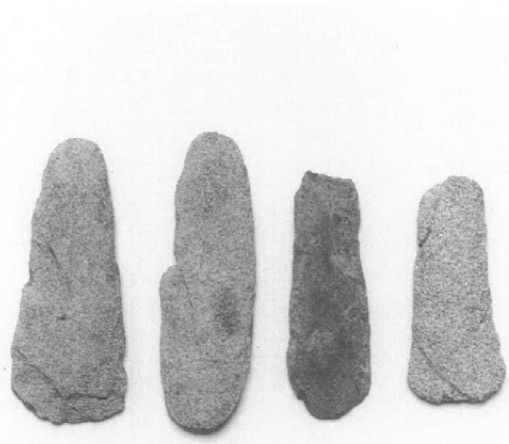
溝址 4　出土土器

土坑 1　出土土器

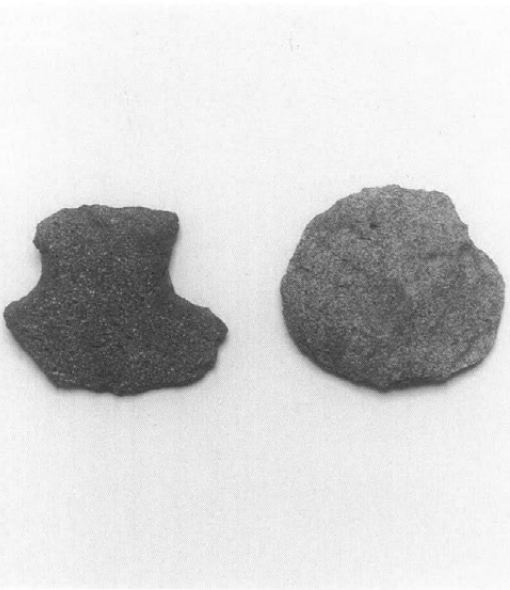
土坑 4　出土土器



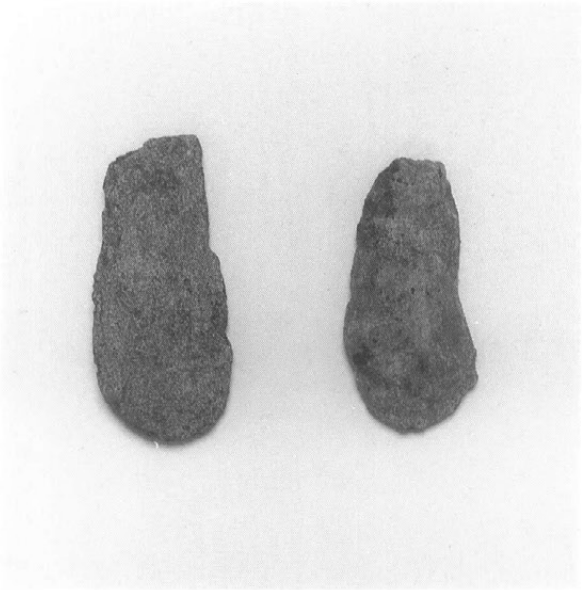
土坑3・23　出土土器



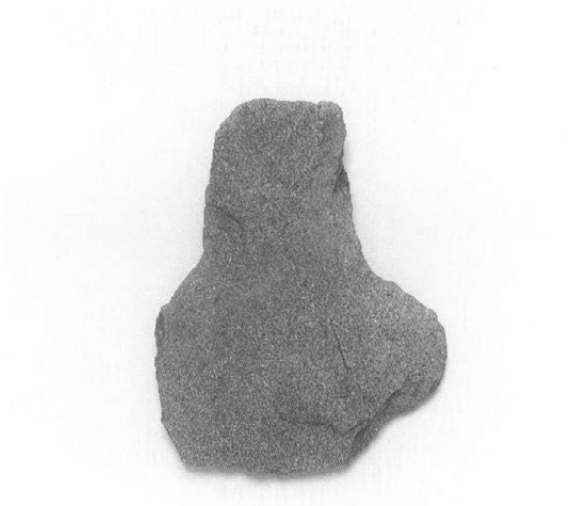
溝址3　出土石器



溝址3　出土石器



溝址４　出土石器



溝址５　出土石器

２号住居址・遺構外　出土石器

重機による拡張スナップ

遺構の掘り下げスナップ

ラジコンヘリスナップ

報告書抄録

ふりがな	くぼじり
書名	久保尻遺跡
副書名	ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山下誠一
編集機関	飯田市教育委員会
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL 0265－53－4545
発行年月日	西暦1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
久保尻	長野県(ながのけん) 飯田市(いいだし) 桐林(きりばやし)	2053		35度 28分 17秒	137度 49分 47秒	19940411 ～ 19940602	1194	信州いいだ農業共同組合ガソリンスタンド建設に先立つ事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保尻	集落址	古墳時代 平安時代 中世	土坑 4基 土坑 1基 竪穴住居址 3軒 溝址 6本 土坑 12基 柱穴 多数	土師器 須恵器 陶磁器 渡来銭 砥石 石器	古墳時代後期の祭祉色の強い土坑を検出した。中世の集落と用水路と考えられる溝址及び水田址を調査した。

久保尻遺跡（くぼじりいせき）

ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘

調査報告書

1996年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印　　刷　飯田共同印刷㈱